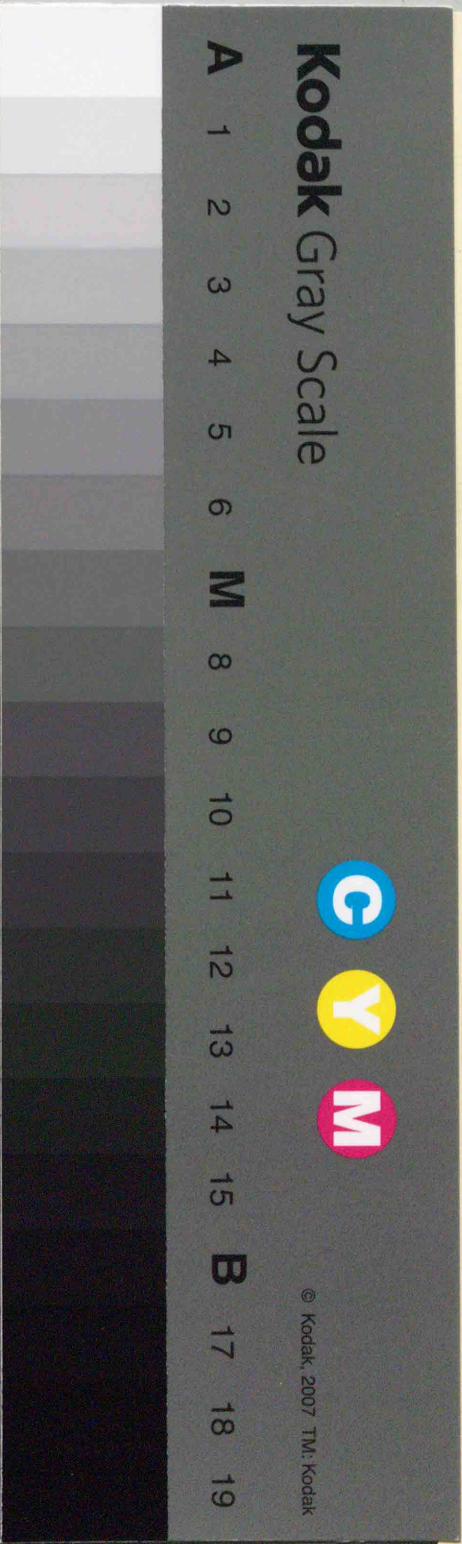
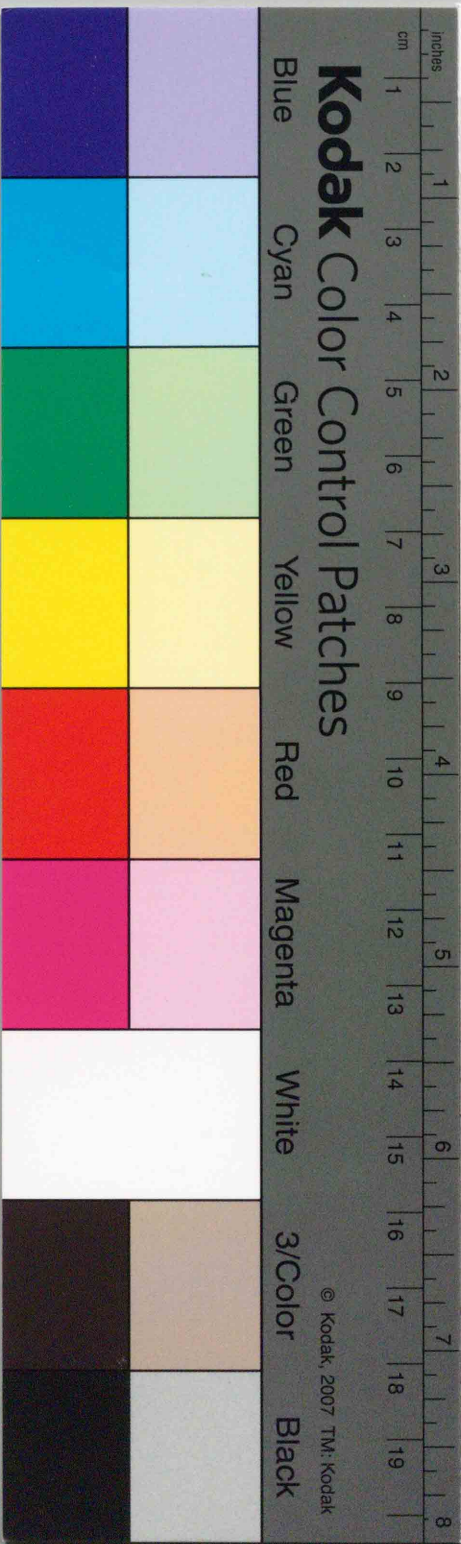
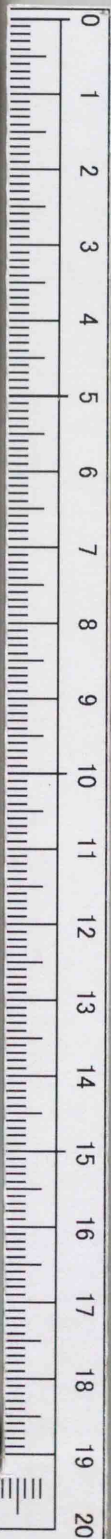


教  
31  
200



42946

教科書文庫

4.
210
31-1934
20000 81582

資料室

教科書文庫

4

210

31-1934

2000081582



尋常小學國史上卷

文部省

広島大学図書

2000081582



3a  
210  
#89

目録

御歴代表

第一 天照大神……………一

第二 神武天皇……………六

第三 日本武尊……………二

第四 神功皇后……………七

第五 仁徳天皇……………三

第六 聖徳太子……………四

第七 天智天皇と藤原鎌足……………六

第八 天智天皇と藤原鎌足(つゞき)……………三

第九 聖武天皇……………三

第十 和氣清麻呂……………四

第十一 桓武天皇……………五

第十二 最澄と空海……………五

第十三 菅原道真……………五

第十四 藤原氏の専横……………六

第十五 後三條天皇……………六

第十六 源義家……………七

第十七 平氏の勃興……………八



第十八	平重盛	六	第二十六	菊池武光	一五〇
第十九	武家政治の起	四	第二十七	足利氏の僭上	一五四
第二十	後鳥羽上皇	二七	第二十八	足利氏の衰微	一五九
第二十一	北條時宗	二三	第二十九	北條氏康	一六五
第二十二	後醍醐天皇	二〇	第三十	上杉謙信と武田信玄	一七〇
第二十三	楠木正成	三〇	第三十一	毛利元就	一七五
第二十四	新田義貞	三七	第三十二	後奈良天皇	一八一
第二十五	北畠親房と楠木正行	四二	年表		

御歴代表

御歴	天皇	御在位年間	御歴	天皇	御在位年間	御歴	天皇	御在位年間
一	神武天皇	元一六	一〇	崇神天皇	五四一六三	一九	允恭天皇	一〇七一一二三
二	綏靖天皇	八〇一三	二	垂仁天皇	六三二七三〇	二〇	安康天皇	一一三一一二六
三	安寧天皇	一一一五〇	三	景行天皇	七二七九〇	二二	雄略天皇	一一六一一二九
四	懿德天皇	一五一八四	三	成務天皇	九一八五〇	三三	清寧天皇	一一三九一二四
五	孝昭天皇	一八六一二六	四	仲哀天皇	八五二八六〇	三三	顯宗天皇	一一四五一二七
六	孝安天皇	二八九三七〇	五	應神天皇	八〇九七〇	三四	仁賢天皇	一一四八一二八
七	孝靈天皇	三七一四六	六	仁德天皇	九七三一一〇五九	三五	武烈天皇	一一五一一二六
八	孝元天皇	四七七五三	七	履中天皇	一〇〇一一〇五	三六	繼體天皇	一一六七一一九
九	開化天皇	五〇三一一五三	八	反正天皇	一〇六六一一〇七〇	三七	安閑天皇	一一九一一九五

元	宣化天皇	二五—二九	四	天武天皇	一三三—一四六	五	嵯峨天皇	一四九—一四八三
元	欽明天皇	二九—三三	四	持統天皇	一三六—一三七	五	淳和天皇	一四三—一四九三
三	敏達天皇	三三—三五	四	文武天皇	一三七—一三七七	四	仁明天皇	一四九三—一五二〇
三	用明天皇	三五—四七	四	元明天皇	一三七—一三七五	五	文德天皇	一五〇—一五二八
三	崇峻天皇	四七—五二	四	元正天皇	一三七—一三四	五	清和天皇	一五二—一五三六
三	推古天皇	五二—五八	四	聖武天皇	一三四—一四九	七	陽成天皇	一五六—一五四四
三	舒明天皇	五八—六一	四	孝謙天皇	一四九—一四八	六	光孝天皇	一五四—一五四七
三	皇極天皇	六一—六五	四	淳仁天皇	一四八—一四四	五	宇多天皇	一五四七—一五五七
三	孝德天皇	六五—七四	四	稱徳天皇	一四四—一四三〇	六	醍醐天皇	一五五七—一五九〇
三	齊明天皇	七四—八二	四	光仁天皇	一四三〇—一四二	六	朱雀天皇	一五九〇—一六〇六
元	天智天皇	八二—八三	五	桓武天皇	一四二—一四六六	三	村上天皇	一六〇六—一六二七
元	弘文天皇	八三—八三	五	平城天皇	一四六—一四六九	三	冷泉天皇	一六二七—一六二九

四	圓融天皇	一六九—一六四四	七	近衛天皇	一八〇—一八二五	八	後嵯峨天皇	一九〇—一九〇六
四	花山天皇	一六四—一六四六	七	後白河天皇	一八五—一八八	八	後深草天皇	一九〇六—一九一九
六	一條天皇	一六四—一六七	七	二條天皇	一八八—一八五	九	龜山天皇	一九九—一九三四
七	三條天皇	一七二—一六七六	七	六條天皇	一八五—一八六	九	後宇多天皇	一九四—一九四七
六	後一條天皇	一七六—一八九六	八	高倉天皇	一八八—一八四〇	九	伏見天皇	一九四七—一九五八
六	後朱雀天皇	一八九六—二〇五	八	安徳天皇	一八四〇—一八四五	九	後伏見天皇	一九五八—一九六一
七	後冷泉天皇	一七五—一七六	八	後鳥羽天皇	一八五—一八五八	九	後二條天皇	一九六一—一九六八
七	後三條天皇	一七六—一七三三	八	土御門天皇	一八五—一八七〇	九	花園天皇	一九六八—一九七六
七	白河天皇	一七三—一七四六	八	順徳天皇	一八七〇—一八八一	九	後醍醐天皇	一九七六—一九九九
七	堀河天皇	一七四—一七六七	八	仲恭天皇	一八八一	九	後村上天皇	一九九九—二〇〇三
八	鳥羽天皇	一七七—一七五三	八	後堀河天皇	一八八一—一八九一	九	長慶天皇	二〇〇三—二〇四三
五	崇徳天皇	一七三—一八〇二	八	四條天皇	一八九一—一九〇二	九	後龜山天皇	二〇四三—二〇五二

一〇〇	後小松天皇	二五三—二七三	二〇九	明正天皇	二八九—三〇三	二六	後桃園天皇	二四〇—二四九
一〇一	稱光天皇	二〇七—二〇八	二一〇	後光明天皇	二〇三—二一四	二九	光格天皇	二四九—二四七
一〇二	後花園天皇	二〇八—二二四	二二	後西天皇	二三四—二三三	三〇	仁孝天皇	二四七—二五〇
一〇三	後土御門天皇	二二四—二六〇	二二	靈元天皇	二三三—二四七	三三	孝明天皇	二五〇—二五二
一〇四	後柏原天皇	二六〇—二八六	二三	東山天皇	二四七—二六九	三三	明治天皇	二五二—二五七
一〇五	後奈良天皇	二八六—三二七	二四	中御門天皇	二六九—二九五	三三	大正天皇	二五七—二五六
一〇六	正親町天皇	三二七—三四六	二五	櫻町天皇	三九五—二四〇七	二四	今上天皇	二五六—...
一〇七	後陽成天皇	三四六—三七二	二六	桃園天皇	二四〇七—二四三三			
一〇八	後水尾天皇	三七二—三八九	二七	後櫻町天皇	二四三三—二四三〇			

# 尋常小學國史 上卷

## 第一 天照大神

天皇陛下の御先祖を、天照大神と申しあげる。大神は御徳のたいそう高い御方で、はじめて稲や麥などを田畑にうゑさせたり、蠶をかはせたりして、萬民をおめぐみになつた。

大神の御弟に、素戔嗚尊といふ御方があつて、たびくあらく、しい事をなさつた。それでも、大神は、いつも尊をおかはいがりになつて、少しもおとがめになることはなかつた。しかし、尊が大神の機屋をおけがしになつ

たので、大神は、とうく、天の岩屋に入り、岩戸を立てて御身をおかくしになつてしまつた。  
 大勢の神々は、たいそう御心配になつた。何とかして大神をお出し申さうと、岩戸の外に集つて、いろく御相談の上、八坂瓊曲玉や八咫鏡などを榊の枝にかけて、神樂をおはじめになつた。その時、天鈿女命のまひの様子がいかにもをかしかつたので、神々はどつとお笑ひになつた。大神は、何事が起つたのかと、ふしぎにお思ひになり、少しばかり岩戸をお開きになつた。すぐさま、神々は榊をおさし出しになつた。大神の御すがたが、その枝にかけた鏡にうつつた。大神は、ますく、ふしぎにお思

尋史上

尋史上

素戔嗚尊が  
劍をおさし  
上げになつ

御孫をこの  
國になつた  
のだし

ひになり、少し戸から出て、これを御らんにならうとした。すると、そばにかくれてゐた手力男命が、大神の御手を取つて、岩屋の中からお出し申しあげた。神々は、うれしさのあまり、思はず聲をあげて、およろこびになつた。素戔嗚尊は、神々に追はれて、出雲におくだりになつた。さうして、簸川の川上で、八岐の大蛇をずたく、に斬つて、これまで苦しめられてゐた人々をおすくひになつたが、この時、大蛇の尾から一ふりの劍を得、これはたふとい劍であるとして、大神におさし上げになつた。これを天叢雲劍と申しあげる。  
 素戔嗚尊の御子に、大國主命といふ御方があつた。命は、

神勅をおく  
たしになつ

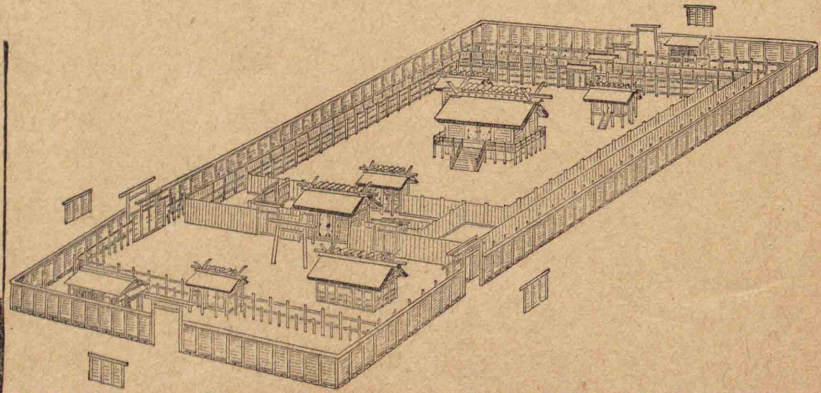
出雲をはじめ方々を平げられて、なか／＼勢が強かつたが、その他の地方は、まだ／＼あるものが大勢ゐて、さわがしかつた。大神は、御孫の瓊瓊杵尊にこの國を治めさせようと、お考へになり、まつ御使を大國主命のところへやり、その地方をさし出すやうにおさとしになつた。命は、よろこんで大神のおほせに従つた。そこで、大神は、いよく、瓊瓊杵尊をおくだしにならうとして、尊に向ひ、「この國は、わが子孫の王たるべき地なり。汝皇孫ゆきて治めよ。皇位の盛なること、天地と共にきはまりなかるべし。」とおほせになつた。萬世一系の天皇をいたゞいて、天地と共にいつの世までも動くことのないわが

尋史上

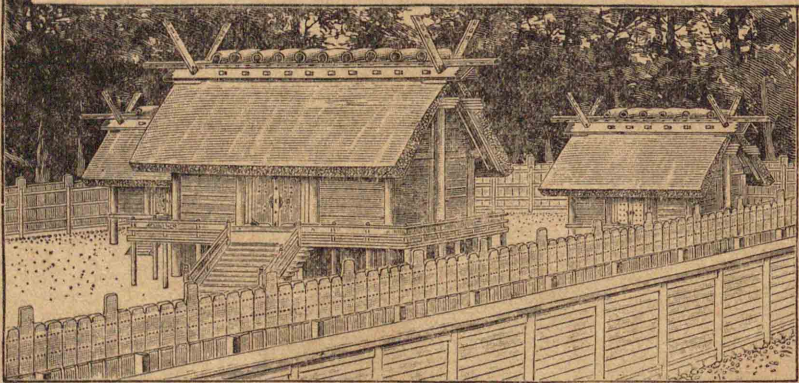
尋史上

わが國體の  
基

三種の神器  
をお授けに  
なつた



(全 景)



皇大神宮(側面)

國體の基は、實にこの時に定まつたのである。大神は、また八坂瓊曲玉、八咫鏡、天叢雲劍を瓊瓊杵尊にお授けになつた。これを三種の神器と申しあげる。尊は、この神器をさゞげ、大勢



皇大神宮

の神々を従へて、日向へおくだりになつた。これから神器は、御代々の天皇がおひきつぎになつて、皇位の御しるしとなさることになつた。

大神は、神器を尊にお授けになる時、この鏡をわれと思ひて、つねにあがめまつれとおほせになつた。それ故、この御鏡を御神體として、伊勢の皇大神宮に大神をおまつり申し、御代々の天皇をはじめ、國民すべてが深く御りやまひ申しあげてゐるのである。

天照大神 天忍穗耳尊 瓊瓊杵尊 彦火火出見尊 鸕鷀草葺不合尊 神武天皇

馬鹿物

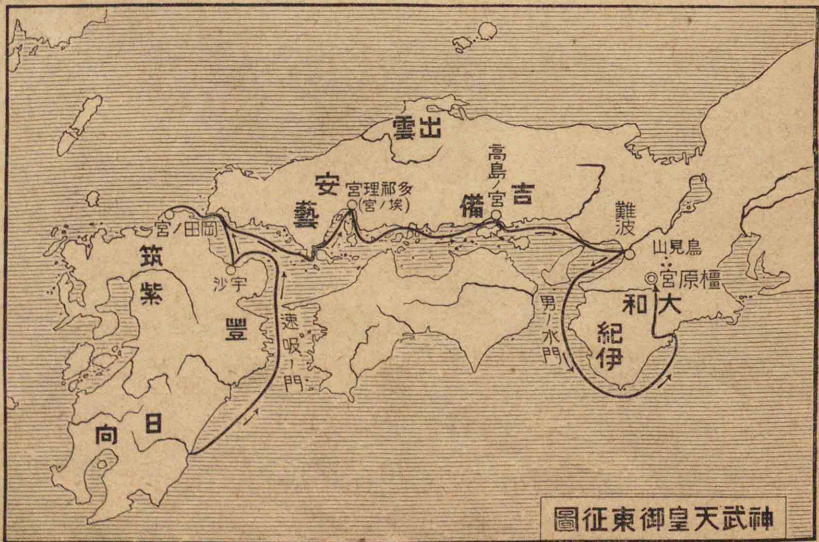
第二 神武天皇

尋史上

尋史上

大和へお向ひになつた

瓊瓊杵尊から神武天皇の御時にいたるまでは、御代々、日向においでになつて、わが國をお治めになつた。けれども、東の方は、なほわるものが大勢ゐて、たいへんさわがしかつた。それ故、天皇は、これらのあるものどもを平げて、人民を安心させようと、舟軍をひきゐて、日向から大和へお向ひになつた。さうして、途中所



神武天皇御東征圖

大和におは  
たりになつ

所にお立寄りになり、そのあたりを平げつゝ、長い間かゝつて難波におつきになつた。

天皇は、河内から大和へお進みにならうとした。わるものどものかしらに長髓彦といふものがゐて、地勢を利用して御軍をふせぐので、これをうち破つて大



神武天皇がいはし山道をお進みになつた

尋史上

大和地方を  
お平げにな



和へおはいりになることは、むづかしかつた。そこで、天皇は、道をかへて、紀伊からおはいりになることになつた。そのあたりは、高い山や深い谷があり、道のないところも多かつたので、ひととほりのお苦しみではなかつた。しかし、天皇は、ますます勇氣をふるひおこされ、八咫鳥を道案内とし、兵士をばげまして、道を開かせながら、とう／＼大和におはいりになつた。

天皇は、それから、しだいにわるものどもを平げ、ふたたび長髓彦をお攻めになつ

た。しかし、長髓彦の手下のものどもが、いつしやうけん  
めいに戦ふので、御軍もたやすく勝つことが出来な  
つた。時に、空がにはかにかきくもり、雹が降出した。す  
と、どこからともなく金色の鵄が飛んで来て、天皇のお  
持ちになつてゐる御弓のさきにとまつて、きら／＼と  
強くかゝやいた。そのため、わるものどもは、目がくらん  
でもはや戦ふことが出来なくて、まけてしまつた。長髓  
彦も、まもなく殺された。

やがて、天皇は、宮を畝傍山の東南にあたる橿原にお建  
てになり、はじめて御即位の禮をお舉げになつた。この  
年をわが國の紀元元年としてゐる。さうして、二月十一

御即位の禮  
をお舉げに  
なつた

紀元元年

尋史上

尋史上

紀元節

御先祖の神  
をおまつ  
りになつた

神武天皇  
祭

日は、またこのめでたい日にあたるので、國民はこぞつ  
て、この日に紀元節のお祝をするのである。

天皇は、また御孝心の深い御方で、御先祖の神々を鳥見  
山におまつりになつた。かやうに、天皇は、天照大神のお  
定めになつたわが帝國の基を、ますます固めて、おかく  
れになつた。そのおかくれになつた日に、毎年行はれる  
御祭は、四月三日の神武天皇祭である。

第三 日本武尊

神武天皇が大和におうつりになつて後は、天皇の御威  
光はおひく、四方にひろがつていつた。けれども、都か

熊襲をお平  
げになつた

ら遠くはなれた東西の國々には、なほわるものが大勢  
ゐて人民を苦しめてゐた。

第十代 景行天皇の御代になつて、九州の南の方に住んで  
ゐる熊襲がそむいたので、天皇は、御子の小碓尊にこれ  
をお討たせになつた。尊は、御生まれつきくわつぱつて、  
その上御力もたいそう強い御方であつたから、この頃  
まだ十六の少年でいらつしやつたが、おほせを受けると、  
と、すぐ九州へお出かけになつた。熊襲のかしらの川上  
のたけるは、かうしたことがあらうとは夢にも知らず、  
大勢のものといつしよに酒を飲んで楽しんでゐた。尊  
は、御髪をとき、少女の御すがたになつて、たけるに近づ

尋史上

尋史上

日本武尊東征圖



き、劔をぬいてその胸をお刺しとほしになつた。不意を  
うたれたたけるは、たいへん驚いて、何とお強いことで  
せう。あなたは實に日  
本一の強い御方です。  
これからは、日本武と  
御名のりなされよ。と  
申しあげて、息が絶え  
た。尊は、そこで御名を  
お改めになり、めでた  
く大和にお歸りにな  
つた。

東國へお向  
ひになつた

その後、東の國の蝦夷がそ  
むいたので、天皇はまた尊  
にこれをお討たせになる  
ことになつた。尊は、いさみ  
いさんで都をお立ちにな  
り、まづ伊勢に行つて  
皇大神宮に參詣し、天  
叢雲劍をいたゞ  
いて、東の國へお  
向ひにな  
つた。



日本武尊が御劍をぬいて草を薙ぎ

尋史上

尋史上

草薙劍

尊が駿河の  
國におつき  
になつた時、  
その地のわ  
るものども  
は、鹿狩をするからと、尊をだまして、廣い野原におさそ  
ひした。さうして、急に草をやきたてて、尊を害しよう  
はかつた。尊は、天叢雲劍をぬいて、あたりの草を薙ぎは  
らひ、大いにおふせぎになつたので、わるものどもは、か  
へつて、自分のつけた火にやかれて、すつかりほろぼさ  
れてしまつた。これから、この御劍を草薙劍と申しあげ



はらひなつた

蝦夷をお平  
げになつた

尊の御てが  
ら

ることとなつた。  
尊は、なほも軍を東にお進めになつたが、蝦夷どもは、御勢に恐れて、弓矢をすてて降参した。かやうにして、尊は國々をお平げになつたが、都へお歸りになる途中、御病のため、とう／＼おなくなりになつた。  
尊はたふとい御身でいらつしやるのに、つね／＼兵士といつしよに難儀をおしのびになり、少年の御時から、西に東にわるものどもをお討ちになつて、少しも御身をおやすめになるおひまがなかつた。さうして、天皇の御位にお即きにならぬうちに、おなくなりになつたのである。けれども、尊の御てがらにより、遠いところまで

尋史上

尋史上

平いで、世の中はたいそうおだやかになつた。尊の御子が、後になつて、天皇の御位にお即きになつた。この御方を第四代仲哀天皇と申しあげる。

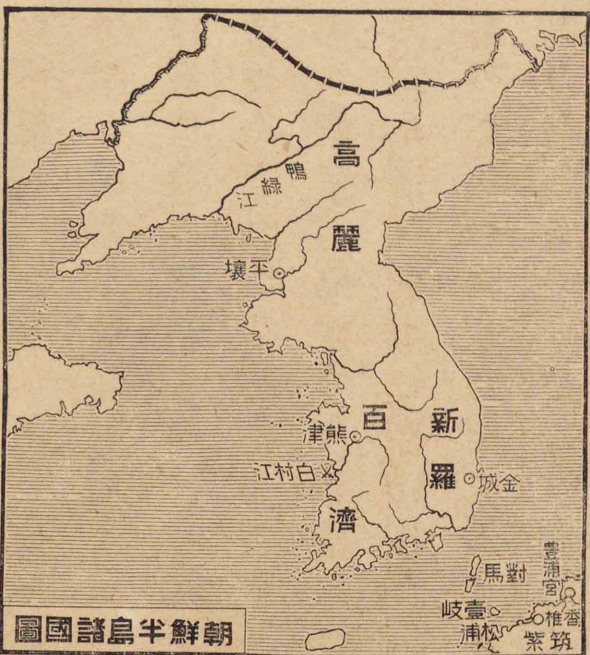
第四 神功皇后

熊襲をお討  
ちになつた

新羅をお討  
ちになつた

仲哀天皇の皇后を、神功皇后と申しあげる。皇后は御生まれつきお賢く、またを、しい御方であつた。天皇の御代に熊襲がまたそむいたので、天皇は皇后と御いつしよに九州へ下つて、これをお討ちになつたが、まだよくしづまらないうちに、おかくれになつた。  
この頃、朝鮮には新羅、百濟、高麗の三國があつて、これを

三韓



平ぐであらうと、皇后はお考へになり、武内宿禰と御相談になつて、御みづから兵をひきゐて新羅をお討ちになることになつた。時に紀元八百六十年である。

三韓といつた。中でも、新羅は一ばんわが國に近くて、その勢はたいそう強かつた。それで熊襲がたびくそむくのは、新羅がこれを助けるためであるから、新羅を従へたなら、熊襲はしぜんと

尋史上

尋史上

三韓を従へ  
なさつた

皇后は、舟軍をひきゐて、對馬にお渡りになり、それから新羅におし寄せられた軍船は海にみちくゝて、その御勢はたいそう盛であつたから、新羅王は非常に恐れて、われは、日頃東の方に日本といふ神國があつて、天皇と申す御方がいらつしやると聞いてゐる。



神功皇后は、新羅の方を御にいらつた

皇後の御て  
がら

今、攻めて来たのは、きつと日本の神兵にちがひない。さうとすれば、どうしてふせぐことが出来よう。といつて、すぐ白旗をあげて降参し、皇后の御前に来て、たとひ太陽が西から出、川の水がさかさまに流れるやうなことがあつても、決して毎年貢はおこたりません。とおちかひ申しあげた。ほどなく皇后は御凱旋になつたが、その後、百濟、高麗の二國もまたわが國に従つた。これから、朝鮮も朝廷の御威徳によくなびいたので、熊襲もしぜんにしづまつた。また、第十代應神天皇の御代に、王仁といふ學者などが百濟から来て、學問を傳へ、機織や鍛冶などの職人もつぎつぎに渡つて来て、これらの

尋史上  
尋史上

人々によつて、わが國はますます開けた。これは、全く神功皇后の御てがらによるものである。

第五 仁徳天皇

人民をおあ  
つはれみにな

第十代仁徳天皇は、應神天皇の御子で、御なさけ深く、いつも人民をおあはれみになつた。天皇は、都を難波におさだめになつたが、皇居はいたつて質素な御つくりであつた。天皇は、ある日、高い御殿におのぼりになり、四方をおながめになると、村々から立ちのぼるかまどの煙が少かつたので、これは、きつと不作で食物が足らないためであらう。都に近いところへ、こんな有様である。



から、都を  
 遠くはな  
 れた國々  
 の人民はどんな  
 に苦しんでゐる  
 ことだらうと、ふびんに  
 お思ひになり、三年の間  
 は税ををさめなくてよ  
 いとおほせ出された。そ  
 のため、皇居はだんく  
 であれてきたが、天皇は少



たつなにんら御を煙のどまかるぼのち立に盛が皇天徳仁

尋史上

人民がよろ  
 こんで皇居  
 しをお造り申  
 した

しも御氣にもおかけにならず、御召しものさへ新しく  
 おつくりになることもなかつた。村々の煙も盛に立ちのぼ  
 るやうになつた。天皇は、これを御らんになつて、われは、  
 もはやゆたかになつた。とおほせられ、人民がゆたかに  
 なつたことを、この上なくおよろこびになつた。人民は、  
 皇居がたいへんあれくづれてゐると傳へ聞いて、もつ  
 たいなく思ひ、税ををさめ、また新しく皇居をお造り申  
 しあげたいと願ひ出たが、天皇はお許しにならなかつ  
 た。けれども、人民は、なほ熱心にたびく、願ひ申した  
 ので、その後三年たつて、やうやくお許しになつた。人民

農業をおす  
すめに  
たすめになつ

は、よろこびいさんで、われ先にとはせ集り、夜を日についで、いつしやうけんめい工事にはげんだので、皇居はわづかの間に美しく出来上つた。天皇は、なほ人民のためをおはかりになつて、堤を築かせたり、池を掘らせたりして、農業をおすゝめになつた。それ故、人々は、皆深く天皇の御恩に感じて、それごとく自分のつとめにはげんだので、世の中がよく治つた。

第六 聖德太子

政治をおと  
りになつた

仁德天皇から御十八代めの天皇を、第三十代推古天皇と申しあげる。天皇は女帝でいらつしやつたから、御甥の聖

尋史  
上

攝政

十七條の憲  
法をお定め  
になつた

德太子を攝政として、政治をおまかせになつた。

太子は御生まれつき人にすぐれてお賢く、一時に十人の訴をあやまりなくお聞分けになつたとさへ傳へられてゐる。その上、朝鮮の學者について深く學問をおさめになつたので、進んだ御考をおもちになり、朝鮮や支那のよいところを取入れて、いろく、新しい政治をおはじめになつた。さうして、遂には十七條の憲法を定めて、官吏も一般の人民も、皆つねに心得ておかねばならないことをお示しになつた。

太子は、また使を支那にやつて、外國とのつきあひをおはじめになつた。その頃、支那は國の勢が強く、學問など

使を支那に  
つた  
おやりにな

も非常に進んでゐたから、日頃高ぶつて、他の國々を皆  
屬國ぞくこくのやうに取りあつかつてゐた。けれども、太子は、少

聖德太子



しもその勢にお恐れにな  
ることなく、かの國に送ら  
れた國書こくしょにも、日出ひい  
づる處ところの天子、書を  
日没ひぼつする處の天子  
にいたす、恙つがなきか。  
とお書きになつて、どこまでも對等たいとうのつきあひをなさ  
つた。支那の國主こくしゅは、これを見て腹はらを立てたが、ほどなく  
使をわが國に送つてきた。そこで、太子も、あらためて留りゅう

尋史上  
尋史上

佛教をおひ  
たろめになつ

學生がくせいをおつかはしになつた。その後、引きつゞいて互に  
ゆききをするやうになつたから、これまで朝鮮を通つ  
てわが國に渡つて來た學問などは、これからは、すぐ支  
那から傳はることとなつた。  
さきに、太子の御祖父でいらつしやる第二十代きん欽明天皇の  
御代に、佛教ぶつぎやうがはじめて百濟から傳はつて來た。太子は、  
深くこれを信仰しんかうして、多くの寺をお建てになつたり、ま  
たしたしく教をお説きになつたりして、熱心に御力を  
つくされたので、これから佛教はだん／＼國內にひろ  
まつた。かりして佛教がひろまるにつれて、建築けんちくやその  
他の技術ぎじゆつなども、目立めだつて進んだ。太子のお建てになつ

法隆寺

た寺の中で名高いのは、大和の法隆寺で、そのおもな建物は、今も昔のまゝであるといはれ、わが國で一ばん古い建物である。

かやうに、太子は、内に於ても、外に對しても、大いにわが國の利益をおはかりになつたが、まだ御位にお即きにならないうちに、御病のため、とう／＼おなくなりになつた。この時、世の中の人々は、親を失つたやうに、皆なげきかなしんだ。

人々が太子をお惜しみ申した

第七 天智天皇と藤原鎌足

推古天皇の御代の前後に、最も勢があつたのは、蘇我氏

蘇我氏の不忠

尋史上

尋史上

である。蘇我氏は武内宿禰の子孫で、代々朝廷の政治にあづかつてゐたため、勢の盛なのにまかせ、しだいにわがまゝなふるまひが多くなつた。蘇我蝦夷は、推古第三十代舒明第三十代皇極の三天皇にお仕へ申したが、たいへん心のよからぬものであつたから、勝手に大勢の人民を使つて生前から自分たちの墓を作り、おそれ多くも、これを陵みさきといつた。この時、聖德太子の御女は、天には二つの日なく、國には二人の君はない。しかるに、なぜかやうなわがまゝをするのかと、大いにこれをおしかりになつた。蝦夷の子入鹿は、父にもましてわがまゝなふるまひが多かつた。殊に、自分に縁のある皇族を御位にお即か

中大兄皇子  
鎌足と入鹿  
をお除きに  
なつた

せ申しあげようと、聖徳太子の御子孫をほろぼし、はては自分の家を宮、その子らを王子と呼ばせて、少しもはばかるところがなかつた。蝦夷父子のやうなもの、朝廷を恐れたてまつらぬ不忠の臣といはねばならぬ。中臣鎌足は、この有様を見て大いに怒り、朝廷の御ために、どうかして入鹿父子をほろぼさうと決心した。この頃、舒明天皇の御子中大兄皇子も、またかねてから蘇我氏のわがま、なふるまひをおにくみになつてゐたので、鎌足は、何とかして自分の心を皇子にうちあげたいものと思つてゐた。ところが、ある時、皇子の蹴鞠の御遊にまわりあひ、御そば近くにゐると、皇子の御靴がぬげ

尋史上

尋史上



中大兄皇子に上りたげ

た。これをとつてさし上げたのが縁となり、これから皇子にお親しみ申して、ひそかに、同じ志の人々といつしよに、謀をめぐらしてゐた。けれども、入鹿は、なかく、用心深く、家のめぐりに池を掘つて、城のやうにかため、出入の時には、大勢の人々を従へ、少しもゆだんをしなかつた。たま皇極天皇の御代に、三韓

から貢物をさし上げることがあつて、大極殿で行はれる式に、入鹿も参列するから、その折をさいはひに、これをほろぼすこととなつた。皇子は、御自身でほこをお持ちになり、鎌足らは、弓矢や劔などを持つて、御殿のわきにかくれてゐた。しかし、人々は、入鹿の勢に恐れて、ためらつてゐた。皇子はたまりかねて、を、しくもまつさきにお進みになつた。そこで、人々もこれにつゞいて、とうとう入鹿を斬り殺してしまつた。皇子は、あらためて天皇の御前に進み、つゝ、しんで入鹿の不忠を申しあげられた。

蘇我氏がほろびた

この時、蝦夷は家にゐたが、入鹿が殺されたことを聞く

尋史上

と、すぐ人々を呼集めて、皇子と戦はうとした。皇子は、さつそく人をやつて、わが國には昔から君臣の別があつて、これを見だすのは不忠であるわけを、ねんごろに説聞かせられたので、人々は、ちりぐに逃去り、蝦夷も、家に火をつけて自害した。

武内宿禰—蘇我石川……馬子—蝦夷—入鹿

第八 天智天皇と藤原鎌足 (ついで)

皇極天皇は、ほどなく、御位を御弟の第三十代孝徳天皇にお譲りになり、中大兄皇子は、皇太子にお立ちになつた。皇太子は、天皇をおたすけになつて大いに政治を改め、こ

大化の新政をおたすけになつた

年號の始

百濟をおす  
つくはせにな

れまで勢のあるものが、たくさん土地をもつて、勝手に人民を使つてゐた。習なはしをやめさせ、これらの土地や人民をすつかり朝廷にをさめさせられた。この新しい政治を大化たいくわの新政しんせいといふのである。大化とは、この時お定めになつた年號ねんごうである。これが年號の始で、その元年は、紀元一千三百五年にあたつてゐる。

孝徳天皇がおかくれになると、皇極天皇がふたたび御位にお即きになつた。第三十代齊明天皇さいめいめいと申しあげる。中大兄皇子は、なほ皇太子として、引きつゞいて政治にあづかつておいでになつた。この頃、支那は唐たうの代で、勢がたいへん盛であつたから、新羅はその助たすけをかりて百濟を

尋史じんし上

ほろぼさうとした。百濟の人々は、朝廷にすくつていた。だきたいと願つてきた。皇太子は、天皇に従つて、すぐ九州に下られたが、天皇が行宮あんぐうでおかくれになつたので、その御あとを受けついで御位にお即きになつた。第三十八代天智天皇と申しあげる。天皇は、兵を出して百濟をすくはさせられたが、運うんわるくわが軍が戦にまけたので、百濟はやがてほろびてしまつた。そこで、天皇は、このまゝ、わが軍をながく海外にとゞめておいても、何の利益もないとお考へになつて、とう／＼これを引きあげさせられた。まもなく、高麗もまた唐にほろぼされたので、新羅がひとり勢を振ふるふやうになり、これから朝鮮は、全

くわが國からはなれてしまつたのである。けれども、唐とは、この後も、つきあひをやめるやうなことはなかつた。

國內の政治を改めなされた

大寶律令

鎌足のてが

これから、天皇は、御心を一筋に國內の政治にお向けになり、まづ都を近江にうつされ、また鎌足にいひつけて、いろく、新しい法令を定めさせられた。この法令は、十二もんむ代文武天皇の大寶の御代になつて大いに改められ、だい大寶律令といつて、ながく政治の本となつたのである。中臣鎌足は、さきに蘇我氏をほろぼしてから、二十年餘りの長い間、真心こめて朝廷にお仕へ申しあげて、がらが多かつたので、天皇はいつも重くお用ひになつてゐ

尋史上

藤原氏の始

た。鎌足が大病にかゝつた時には、おそれ多くも、その家に行幸をなさつて、したしく病氣をおいたはりになり、何でも望むことがあるなら遠慮なく申せ」とおほせられた。鎌足は、深く天皇の御恩に感激して、私のやうなおろかな身に、何のお望み申しあげることがございませう。たゞ一つ、どうか私の葬儀をてあつくなさらないやう、お願い申しあげます」とお答へ申しあげた。しかし、天皇は、やがて鎌足に最も高い位をお授けになり、また藤原といふ姓をお與へになつた。後に榮えた藤原氏は、この時に始つたのである。鎌足は、大和の談山神社にまつられてゐる。



第九 聖武天皇

奈良時代

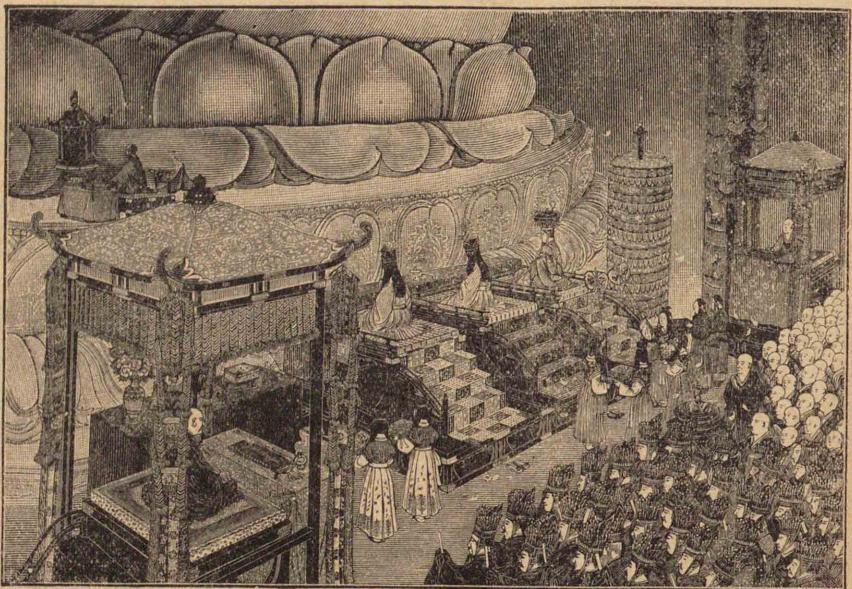
文武天皇の御次に、第四十代元明天皇が御位にお即きになつた。天皇は、紀元一千三百七十年(和銅三年)都を大和の奈良におさだめになつた。これまでは、都はたいいてい御代ごとにかはる習はしてあつたが、これから御七代、七十年餘りの間は、おほむね奈良の都にいらつしやつたから、この間を奈良時代といふのである。

一ばん盛な御代

奈良時代の中で一ばん盛であつたのは、第四十代聖武天皇の御代である。この頃は、たびく、唐とゆききして、世の中がたいそう開けていつた。それで、都も唐の風にならつてりつぱになり、宮殿などの建物は、壁を白く、柱を赤

尋史上

佛教を盛になさつた



大 佛 供 養

くぬり、青瓦で屋根をふいて、まるで繪のやうな美しさであつた。さうして、人々の服装も一樣にはなやかになつた。聖武天皇は、日頃あつく佛教を御信仰なさつた。それ故、この教をひろめて、世の中がおだやかによく治るやうにした。いものとお考へになつて、

國分寺

東大寺

國ごとに國分寺を造らせられた。取分け、奈良には、大和の國分寺として、東大寺を建てさせ、大佛を鑄てこれをまつらさせられた。その大佛殿は、後にたびく造りかへられたが、高さが十五丈餘りもあつて、木造の建物では世界第一といはれてゐる。また大佛も高さが五丈餘りもあつて、その大きいのに驚かぬものはない。

光明皇后

聖武天皇の皇后は、藤原鎌足の孫でいらつしやつて、世に光明皇后と申しあげる。皇后も、またあつく佛教を御信仰になつた。御生まれつき御なさけ深く、貧しい人々のために病院を建てて、薬をおめぐみになり、また孤兒を集めてこれを養はせ、ひろく人民をおいたはりにな

尋史上

尋史上

つた。

第十 和氣清麻呂

行基と道鏡

佛教がだんく盛になると、えらい僧がつぎくに出てきた。中でも、行基は、諸國を旅行して、いたるところで、寺を建て、道を開き、橋をかけ、池を掘り、舟つきを定めな

清麻呂が宇佐にいつた

どして、大いに世の中の利益をおこしたので、人々からたいへんうやまはれた。けれども、一方には、道鏡のやうな心のわるい僧も出た。道鏡は、第四十代、稱徳天皇の御代、朝廷にお仕へして、政治にもあづかり、勢が強かつた。たまく、道鏡にへつらつて

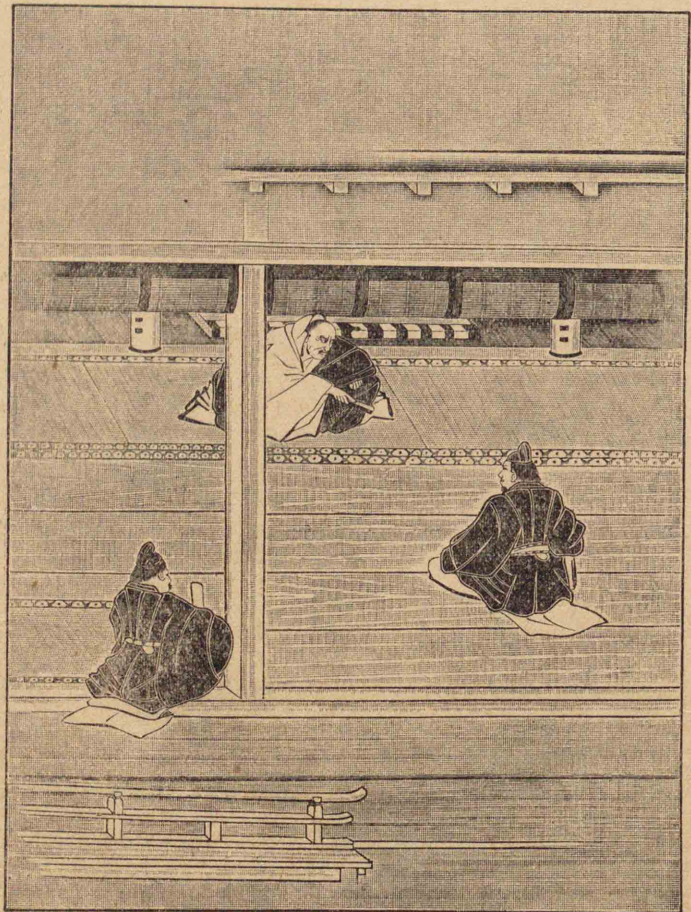
るたものが、宇佐八幡の御告であるといつはつて、道鏡を皇位に即かせると、天下はおだやかに治りませうと、天皇に申しあげた。道鏡はこれを聞いて、たいそうよろこんだが、天皇はもう一度神の教を受けてくるやうにと、和氣清麻呂を宇佐におやりになつた。

神の教を申しあげた

清麻呂が宇佐に行かうとした時、道鏡は清麻呂に向つて、高い官位を與へるから、自分によいやうにはからつてもらひたいといつて、利を以て味方にさそひ入れようとした。けれども、清麻呂は、忠義の志の深い、りつばな人であつたから、決して自分の出世のため、にその志をかへるやうなことはなかつた。宇佐から歸つてくると、

尋史上

すぐ天皇の御前に進み出て、わが國は、國の初から、君と臣との別は明らかに定まつてゐる。どんなことがあつ



和氣清麻呂が神の教を申しあげた

ても、臣であるものを君とすることはない。無道のもの、早く除け。といふ神の教を、少

清麻呂の忠義

しも恐れるところなく、そのまゝ、きつぱりと申しあげた。

道鏡は大いに怒つて、清麻呂を大隅おほすみに流し、しかも、その途中で殺させようとした。その時、ちやうどはげしい雷雨があつたため、清麻呂は、危あやふいところをやつとまぬかれることが出来た。それから、まもなく、第四十九代光仁天皇の御代になつて、道鏡は下野しもつひに追ひやられたが、清麻呂は呼びかへされ、第五十代桓武天皇の御代まで朝廷にお仕へ申して、ますます、忠義をつくし、重い役やくに用ひられた。今は、京都の護王神社ごおうじんじやにまつられてゐる。わが國の臣民は、皆つねに清麻呂のやうな心がけを忘れてはならぬ。

尋史上

姉の廣虫

清麻呂の姉の廣虫ひろむしも、また真心こめて朝廷にお仕へ申しあげ、弟ともたいへん仲がよかつたので、人々は皆感かん心してゐた。清麻呂が流された時、廣虫も備後びんごに流されたが、清麻呂といつしよに呼びかへされて、ふたたび朝廷に用ひられた。廣虫は、つゝしみ深い人で、一度も他人のかげ口くちをいつたことがなく、またなさけ深く、たくさんおほくの棄兒すてこを拾ひろひ集めて、育てあげたが、その數は八十人餘りにも及んだといふことである。今は、廣虫も護王神社に合はせまつられてゐる。

第十一 桓武天皇

都を京都に  
おさだめに  
なつた

桓武天皇は、光仁天皇の御子である。天皇は和氣清麻呂の申し出た意見をおとりあげになつて、今の京都の地



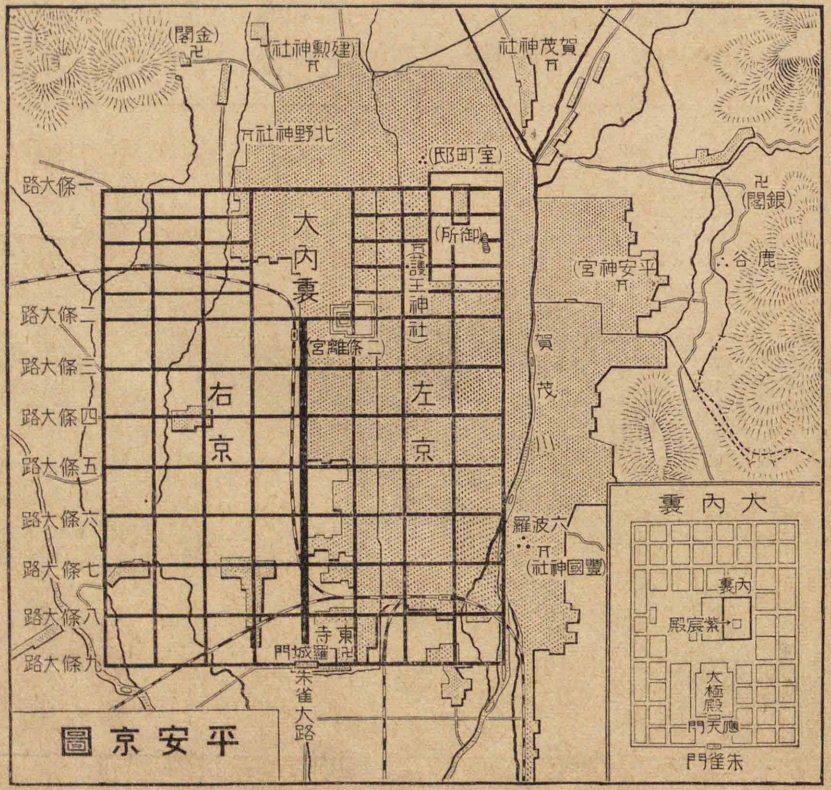
が、山河のうるはしい上に、便利がよいので、桓武紀元一千四百五十四年(延暦十三年)都をここに

おさだめになつた。四方から集つて來た人民は、皆よろこんで、この新しい都を平安京といつた。これから明治の初まで一千七十年餘りの間、御代々の天皇は、たいていこの都にいらつしやつた。

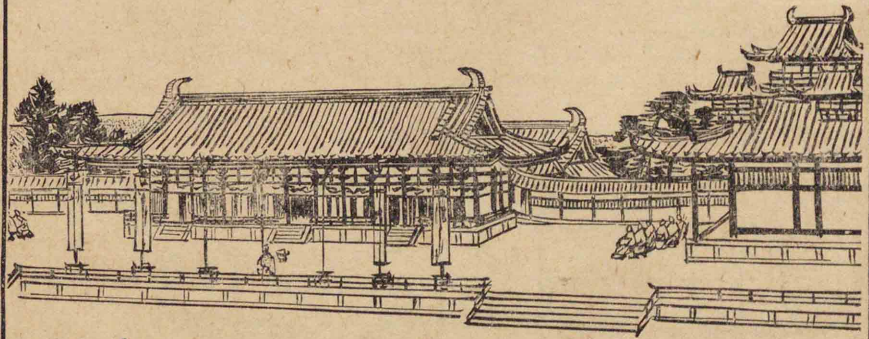
尋史上

平安京の有  
様

平安京は、奈良の都にまねてあつたが、かまへはそれよりもずつと大きかつた。都の中央には、南北に通ずる大道があつて、京が二つに分れ、その上、碁盤の目のやうに、幾筋もの道路が縦



横よこに開かれて、實まことによくととのつてゐた。大道だいどうの北きたの端はしには大内だいだい裏りがあつて、その中に内裏だいりや大極殿だいごくでんや諸官しよくわん省しやうがあつた。内裏だいりは天皇てんかうのいらつしやる所で、紫宸殿しんてんをはじめ、たくさんの御殿ごでんがある。大極殿だいごくでんは大事だいじな御儀ごぎ式しきを行はせられる所



大 極

尋史上

平安神宮

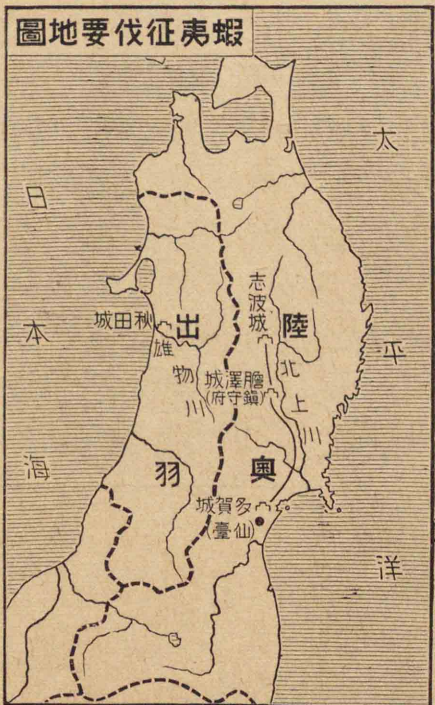
坂上田村麻呂さかのかみむらまろに蝦夷えみを討たせに

で、今、桓武天皇をおまつりしてある京都の平安神宮へいあんじんぐうは、この御殿の形をうつして造つたものであるから、これによつて昔の有様をだいたい知ることが出来る。さきに、日本武尊が蝦夷を御征伐ごせいばつなさつたが、その後、齊明天皇の御代に、阿倍比羅夫あへひらおがふたたび舟軍ふねいぐさをひきゐて、日本海の海岸地方でさわいでゐた蝦夷をうち平げた。けれども、太平洋にのぞんでゐる地方の蝦夷は、なほたびく、そむいて人民を苦しめてゐたので、桓武天皇



殿

は坂上田村麻呂を征夷大將軍としてこれをお討たせ  
 になつた。田村麻呂は、勇武な生まれつきで、ひとたび怒  
 ると猛獸でも恐れて逃出すほどであつたが、またなま  
 け深くやさしい人で、笑ふ時には、幼兒でも親のやうに  
 なつて、はひ寄つたといふことである。田村麻呂は、兵



をひきゐて出征し、い  
 たるところで、てがら  
 をたて、とうく、今の  
 陸中にまで進んで、賊  
 をうち平げたので、こ  
 れから、東北の地方は、

尋史上

田村麻呂の  
てがら

はじめておだやかになつた。

田村麻呂は、そのてがらによつて、朝廷からあつくお褒  
 めにあづかつた。さうして、官や位がしだいに高くなつ  
 て、第五代 嵯峨天皇の御代になくなつた。天皇は、これをた  
 いそう惜しませられ、特に山科に墓地をたまはり、屍を  
 平安京の方に向け、武器をそへて、おてあつく葬らせら  
 れた。これから後、將軍となつて出征する人々は、皆この  
 墓に参詣して、勝利を祈つたといふことである。

第十二 最澄と空海

桓武天皇から御數代の間は、國內がよく治つた上に、最

最澄が天台宗を傳へた

澄空海といふ名高い僧もあらはれて、世の中はますます開けていった。最澄は近江の人で、桓武天皇の御代に、比叡山のいたゞきに寺を建て、みづから佛像をきざんで、こゝにまつた。天皇の御信任があつく、そのおほせを受けて、唐に渡つて佛教を學び、たくさんの經文を持ちかへつて、朝廷にさし上げた。その傳へた新しい宗旨は、天台宗といふのである。

人々の便利をはかり多くを養つた弟子を

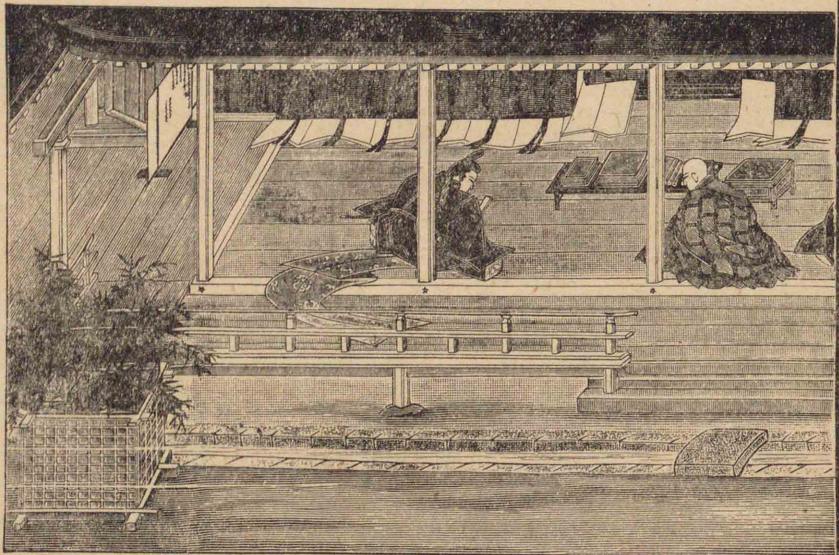


最澄は、諸國をまはつて熱心に教をひろめたが、その中間にも、人里はなれた山中

尋史上

尋史上

空海が眞言宗を傳へた

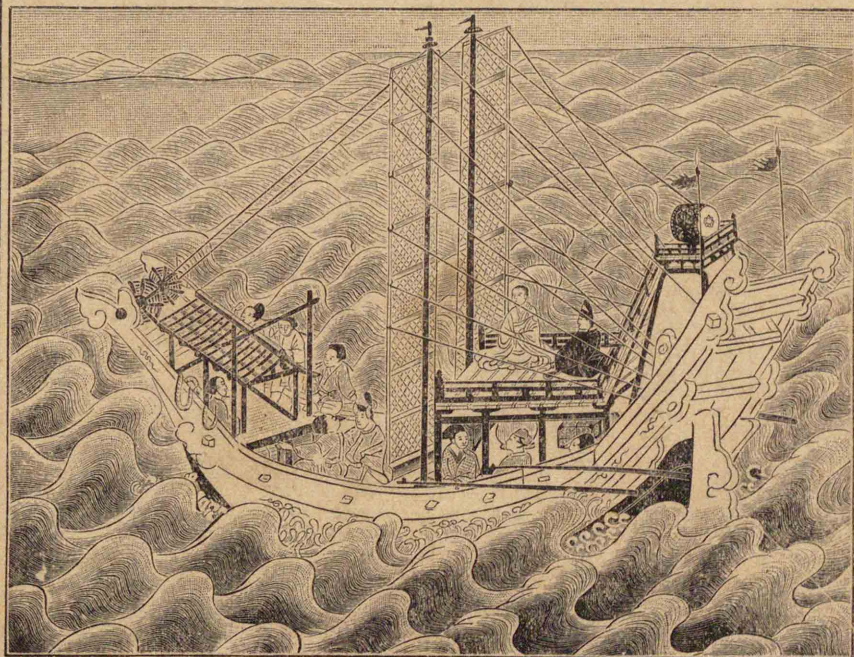


澄が經文を朝廷に宿屋を建てて、旅人の便利をはかつた。また大勢の弟子を養つて、宗旨を研究させたので、學問の深い僧が多く世に出るやうになつた。空海は讃岐の人で、生まれつき賢く、神童のほまれが高かつたが、なほ一心に勉強して、學問がますます深くなつた。さうして最澄と



學問をひら  
め世の人の  
利益をはか  
つた

いつしよに唐におも  
むいて佛教を學び、三  
年の後に歸つて來て、  
眞言宗といふ新しい  
宗旨を傳へた。それか  
ら嵯峨天皇のあついで、  
御信任をいたゞいて、  
はじめて紀伊の高野  
山を開いた。  
空海も諸國をめぐつ  
て盛に宗旨をひろめ



空海が唐に渡る

尋史上

おくり名を  
たまはつた

つゝ世の中のためになることをはかつた。殊に、讃岐に  
萬農池の堤を築いて、今に至るまで利益を與へてゐる。  
また、京都に學校を建てて、身分の貴いとか賤しいとか  
の區別なく、ひろく人々の入學を許して、いろ／＼の學  
問を授けた。なほ空海は詩文にすぐれ、取分け文字がた  
くみであつた。かのいろは歌も空海が作つたものであ  
らうと傳へてゐる。  
これから佛教はますますひろまり、學問もしだいに盛  
になつて、世の人々はながく最澄・空海の二人をうやま  
つた。後に朝廷から、最澄には傳教大師、空海には弘法大  
師のおくり名をたまはつた。

第十三 菅原道眞

平安京の御代の初頃は、朝廷の御威光が盛であつたが、まもなく藤原氏がだんく勢を振るふやうになつた。藤原氏は、その先祖の鎌足が、大功をたてて重く用ひられてからは、世々大臣となるものが多く、光明皇后から後は、御代々の皇后もたいていこの氏からお出になる習はしとなつた。それ故、藤原氏の一門には、攝政や關白の高い官職にのぼるものもあつて、朝廷の政治を思ふまゝに動かすことが出来たので、藤原氏に縁のないものは、すつかり勢を失つてしまつた。

道眞が重く  
用ひられた

攝政  
關白

藤原氏ひと  
たりが勢を得

第五十代 宇多天皇は、藤原氏の勢があまりに強いので、どう

尋史  
上

道眞が時平  
つと政治を行

かしてこれをおさへようと、お考へになり、菅原道眞を重く用ひて、その勢を分たうとなさつた。道眞は、學者の家に生まれて、幼い時から學問にはげみ、十一二歳の頃には、すでに詩を作つて人々を驚かしたくらゐで、やがて名高い學者となつた。その上、心の正しいりつばな人であつたから、朝廷に仕へるやうになると、天皇の御信任が深かつた。

宇多天皇の御次に、御子の第十代醍醐天皇が御位にお即きになつた。天皇は、いたつて御なさけ深く、ある寒い夜、御衣をおぬぎになつて、貧しい人民のつらさをしたしくお思ひやりくださつたほどの御方であつた。天皇も、

また御父の御志をお受けつぎになつて、道真を右大臣うだいじんに引きあげて、左大臣さだいじんの藤原時平ときひらと並んで政治を行はしめられた。

筑前にうつされた

ところが、時平はもとく、よい家からの生まれではあるが、年が若い上に、學問もたうてい道真にかなはなかつたので、天皇の御信任は、道真のやうにあつくはなかつた。それ故、不平ふへいのあまり、道真を、天皇にいろく、あしざまに申しあげた。これがため、道真は官職をおとされて、筑前ちくぜんの太宰府だざいふにうつされた。道真は、家を出る時、日頃愛してゐた庭の梅にまで名残なごりを惜しんで、

尋史上

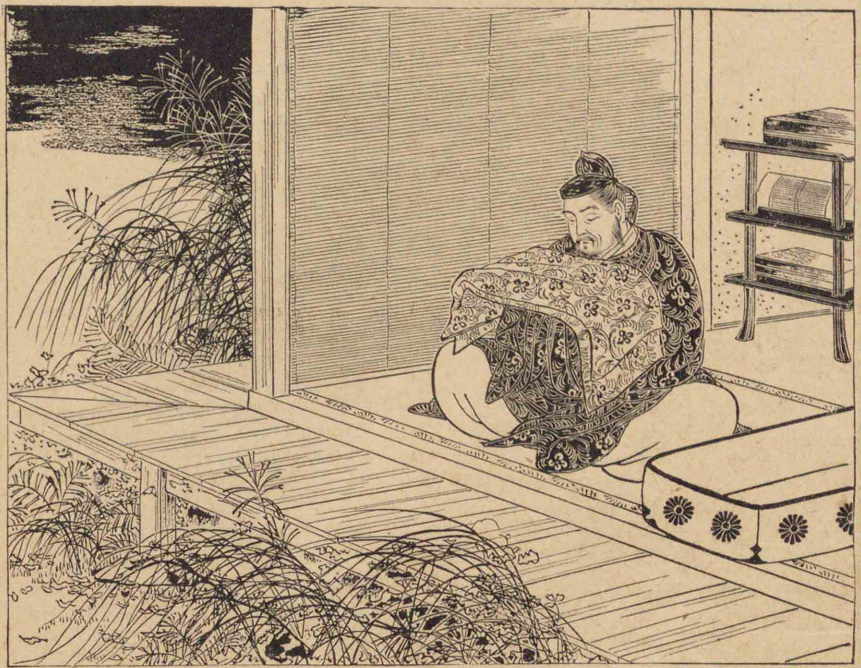
こちふかばにほひおこせよ、梅の花、

あるじなしとて春をわするな。

といふ一首の歌をよんだ。それから海を渡つてはるばる筑前に下つたが、その後も門を堅く閉ざして一室にきんしんし、かた時も天皇の御事をお忘れ申すことわすれ申すことはなかつた。いつのまにか、春が去つて夏もすぎ、はや九月十日となつた。ちやうど去年の今日今夜こそ宮中の御宴えんの席にはべり、詩をさし上げて天皇の御心にかなひ、御衣をいたゞいた日であることを思ひ出しては、今更のやうに、君恩のかたじけなさに感じ入り、恩賜おんみの御衣をさゞげて、涙ながらにあつく御禮を申しあげ、詩を作

かた時も天皇の御事をお忘れ申した

天満天神



菅原道真が御衣をさげ、詩を作つた

つてその真心を述べたのであつた。かうして、道真は、太宰府でつゝしんでゐること三年に及んだが、とう／＼病氣にかゝつて、そこでなくなつた。けれども、後になつて、道真に罪のないことが明らかにになり、朝廷からは、高い官位を

尋史上

尋史上

贈られ、また世の人々は、天満天神とあがめらうやまつた。さうして、京都の北野神社や筑前の太宰府神社をはじめ、全国いたるところにまつられてゐる。

藤原鎌足―不比等……冬嗣―良房―基經

時平  
忠平

第十四 藤原氏の専横

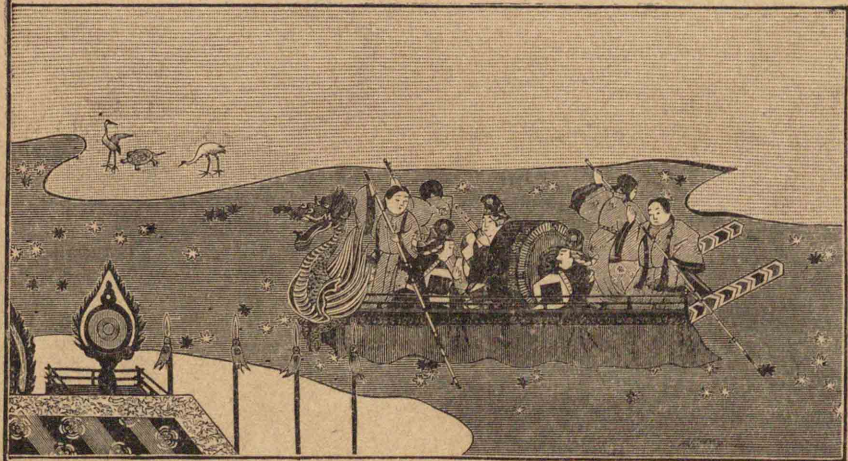
菅原道真がしりぞけられて、宇多天皇のせつかくの御志もむだになつた後は、藤原氏は、勢がますます盛になり、勝手に朝廷の政治を行つて、何でもその思ひ通りにならないものはなかつた。しかも、夜となく晝となく、ただ遊び楽しんで、いつか政治に力を入れようとはし

藤原氏が勝  
手に政治を  
行つた

道長が榮華をきはめた

なかつた。

藤原氏は、道長の時になつて最も榮華をきはめた。道長は、時平の弟の忠平の子孫で、第六十一條第六十三條、第六十代後一條三天皇の御代にわたり、三十年餘りの間、朝廷にお仕へして、大いに勢を振るつてゐた。さうして、その女は三人まで皇后となり、その御腹の皇子は、三人まで引きついて御位にお即きになつた。取



藤原氏の

尋史上

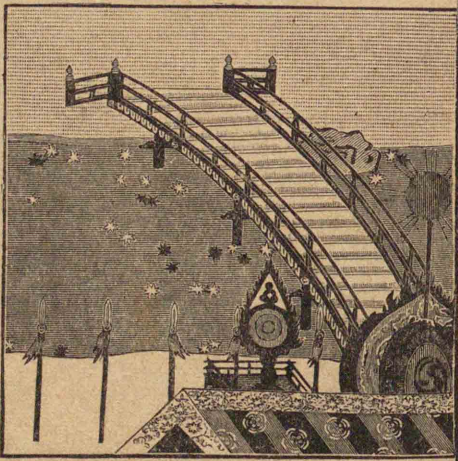
分け、後一條天皇の御代に、道長が攝政となり、その女がまもなく皇后に立たれた時には、道長はよろこびのあまり、

このよをば

わがよとぞ思ふ、もち月の

かけたることもなしと思へば。

といふ歌をよんで、自分の望が皆かなつたのを、十五夜の満月にくらべて、一門の榮華をほこつたのであつた。かうして、道長は、その富は皇室にもまさり、たいそうおごつた生活をしてゐた。かねて道長は京都に法成寺を



遊樂

道長父子の専横

建てたが、これは奈良の東大寺にもおとらぬ大きな寺であつた。その時、わがまゝにも公卿たちにいひつけて、宮中や諸官省などにある石を取つて建築場に運ばせた。ところが、工事がまだ出来上らないうちに、道長が病にかゝつたので、その子の頼通は命令を出して、朝廷の事は後まはしにしても、法成寺の御用は決して怠らないやりに、といひつけた。それ故、公卿たちは、われ先にと、日々大勢の工夫をやつて手傳はせ、國々の役人は、朝廷にさし上げるものはさしおいても、まづこの寺の材木や瓦などをさし出した。ために、工事は思ひのほか早く出来上つた。そこで、道長はしばらくこゝに移り住んで

尋史上

ゐたが、まもなくなくなつた。

このやりに、道長父子は、つねに朝廷を恐れないで、わがまゝなふるまひが多かつたが、頼通やその弟の教通も、つゞいて攝政や關白となり、専横はますますくつゝのるばかりであつた。

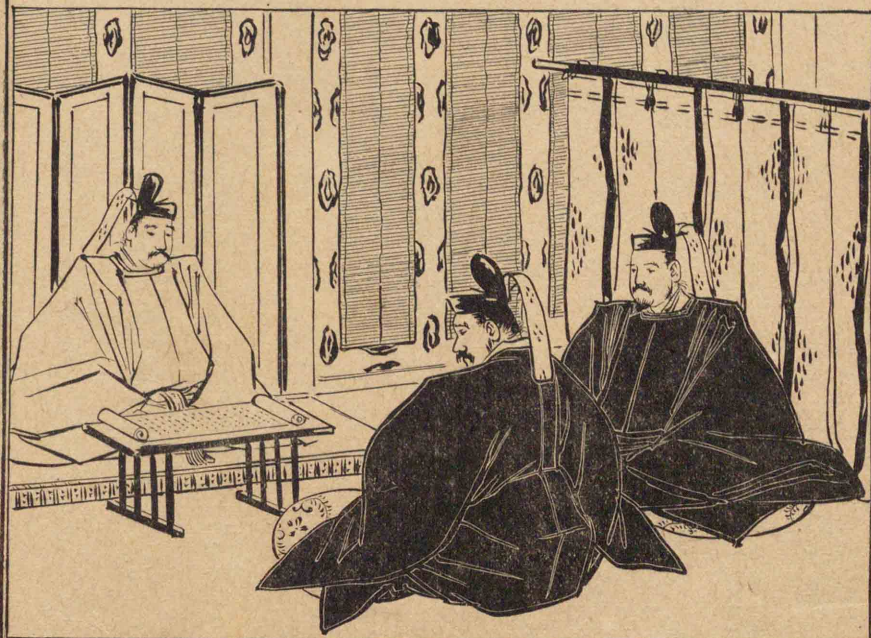
藤原忠平—師輔—兼家—道長—頼通……忠實—忠通  
教通—頼長

第十五 後三條天皇

藤原氏の勢が最も盛であつたのは、道長と頼通との代であつたが、第七十代後三條天皇が御位にお即きになつてからは、その勢はしだいに衰へはじめた。

藤原氏が衰へはじめた

關白賴通が  
天皇をお恐  
れ申した



後三條天皇が學問ににおはなみにつた

後三條天皇は第十代後冷泉天皇の御弟で、御年十二で東宮にお立ちになつた。それから二十年餘りも東宮でいらつしやる間に、大江匡房を師として一心に學問におはげみになり、内外の歴史にあかるくおなりになつた上に、取分け、御生

尋史上

關白教通が  
わがまゝを  
うしむや  
うになつた

まれつきが嚴格でいらつしやつた。それ故、わがまゝな頼通も、かねぐ、天皇をお恐れ申してゐたので、天皇が御即位なさる前に、關白をやめて宇治に隠居した。頼通に代つて關白となつた弟の教通も、また勢にまかせて、天皇の御心にそむくことがたびぐ、であつた。ある時、天皇にお願いひ申しあげたことを御許がなかつたので、たぐちに一族の公卿をひきつれて朝廷を退出し、よりとした。そこで天皇は、やむを得ず、その願をお許しになつた。教通は、かやりにして、一度は自分の思ひ通りにおし通すことが出来た。けれども、これから後は、天皇をお恐れ申して、わがまゝな行をつゝしむやうになつ

天皇が政治  
におはげみ  
になつた

た。  
天皇は、藤原氏の勢をおさへて政治におはげみになつた。おそれ多くも、日々の御膳部をはじめ、すべてに御儉約なまつて、模範をお示しになり、官吏などが、大きな別荘などを作つておごりにふけるのを、お戒めになつた。ある時など、石清水八幡宮へ行幸をなさると、拜觀者のある時など、石清水八幡宮へ行幸をなさると、拜觀者の車にかざりの金物があつてあるのを、御らんになり、わざわざ御輿をとめさせて、皆これをお取らせになつたことがあつた。かうして、久しくみだれてゐた政治も、しぜんにとゝのつて、人々の心もたいそう引きしまつてきた。けれども、天皇は、御位にいらつしやること、わづか

尋史上

頼通が天皇  
をお惜しみ  
申した

院政の始

に五年で、皇位を御子の第七十代白河天皇にお譲りになり、まもなくおかくれになつた。この時、御年はまだ四十でいらつしやつた。宇治にゐた前の關白頼通は、このことを聞いた時は、ちやうど食事をしてゐたが、驚きのあまり、思はず箸をおとし、どうしてかうも早くおかくれなさつたのであらう。御國のため、この上もない不幸なことだ。となげいて、お惜しみ申しあげたといふことである。  
白河天皇もまた御父の御志をお受けつぎになり、決して政治を藤原氏におまかせにならなかつた。さうして、御位をお譲りなまつた後も、なほ院においでになつて、



政治をおとりになつたので、さすがに盛であつた藤原氏の勢も、ますます衰へるやうになつた。

第十六 源義家

武士がおこつてきた

藤原氏が衰へていく間に、武士はしだいに勢を増してきた。さきに、藤原氏が榮えて、その一門のみが高い官職についたから、どんなに才能がすぐれてゐた人でも、京都では思ふやうな立身が出来なかつた。そこで、たいいてい地方の官吏となつて諸國に下り、藤原氏が地方の政治をかへりみない間に、そのまゝそこにとゞまつて、武士となるものが多かつた。中でも、源氏は第五十六代清和天皇

清和源氏

尋史上

から出て、早くから勢が強く、代々てがらをたてて武名をあげたが、義家の時になつて、いつそその名があらはれた。

頼義が義家と共に安倍氏を討つた

源義家は頼義の長男で、八幡太郎となへた。後冷泉天皇の御代に、安倍頼時といふものが陸奥にゐて、たくさんの土地をかすめ取り、人民を従へてそむいたので、朝廷では、頼義にいひつけて、これを討たせられた。頼義は、義家と共に陸奥に行つて頼時と戦ひ、とう／＼これを平げた。けれども、頼時の子貞任や宗任らは、なほ勢が強く、なかく、降参しなかつた。そこで、頼義は進んでこれと戦つたが、折からの寒さに、雪さへ降つて、行軍がか

義家の武勇

なり難儀な上に、兵糧ひやうが足りないため、人も馬も疲つかれは  
てて、さんぐにうち破られた。この時、義家は年やうや  
く十七であつたが、すぐれた勇士ゆうしで、取分け、弓が上手じやうずで  
あつたから、すぐ馬を飛ばして、たちどころに大勢の敵  
を射殺いころした。しかも、味方は頼義父子をはじめ、主従しゆじゆうわづ  
かに七騎ななきとなつたが、切りまくり切りまくつて、やつと  
敵の圍かこみをのがれることが出来た。

頼義が安倍  
氏をほろぼ  
した

かうして賊の勢がいよく、強くなつてきたので、頼義  
は、出羽での人清原武則きはらのたけのりに助をたのんだ。武則は、すぐ兵を  
ひきゐて助けに來た。頼義は、これに力を得て進軍しんぐんし、い  
たるところで賊を破つて、衣川ころもがはの館たてに攻寄せたから、さ

尋史上

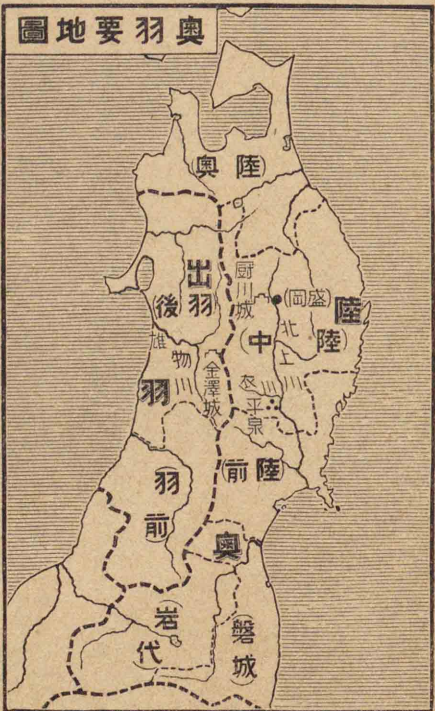
義家のなさ

すがの貞任も、館をすてて逃出した。義家は、これを見て、  
射殺さうと追ひつめ、衣のたてはほころびにけり」とよ  
みかけると、貞任は、すぐふりむいて、年をへし糸のみだ  
れの苦しさに、と答へた。そこで、義家は大いに感心して、  
弓につがへてゐた矢をはづして、そのまゝ、貞任を逃が  
してやつたといふことである。かやうな行は、實に武士  
のなさけといふべきであらう。それから、なほも進んで、  
貞任らを厨川くりがはの城に圍んだが、賊は城の中に高い櫓やぐらを  
かまへて、その上から官軍をねらひうちにした。官軍は、  
そのためにたいそう苦しんだ。その時、頼義は兵士にい  
ひつけて、人家じんかをこはして堀をうめさせ、また、たくさん

草を刈つて河岸に山のやりに積みあげさせ、自分は馬からおりて、はるかに京都の皇居ををがみ、心をこめて石清水八幡宮にお祈りして、火をこゝに投げこんだ。ところが、大風がにはかに吹きおこつて、火は見るく、うち城の中にもえうつた。賊軍は思ひもよらぬことだつたので、上を下へと、たちさわいでゐた。頼義は、こゝぞとばかりに攻寄せて、とう／＼貞任らを斬り殺し、宗任らを生捕にして、この亂をすつかりしづめた。この戦を前九年の役といふのである。後に、頼義は、鎌倉に八幡宮を建てて、神恩にあつく御禮を申し述べた。

前九年の役  
義家が兵法を學んだ

尋史上



の物語をしてゐた。それを、大江匡房がふと、たち聞いて、義家は、大將になれるすぐれた才能は持つてゐるが、惜しいことに、まだ兵法を知らない。と、ひとりごとをいつた。義家の家來がこれを聞いて、たいへん腹を立て、かくと義家に告げたが、義家は少しも怒らず、かへつて、もつとものことだ。といつて、まもなく匡房を師として兵法を學んだ。

さて奥羽の地方では、さきに清原武則が頼義に味方し

奥羽地方が  
たまたみだれ

て安倍氏の亂を平げてからは、その一族が安倍氏に代つて勢を得たのであつたが、白河天皇の御代になると、その子孫の間に争が起つて、奥羽地方はふたたびみだれた。

義家は、陸奥守となつて、この亂をしづめようとしたが、武則の子の武衡らは、金澤にたてこもつて義家にてむかつた。ある時、義家は、これを攻めようとて進軍する途中、はるかに雁が列をみだしてゐるのを見た。さうして、すぐ兵法に「野に伏兵がある時は、その上を飛ぶ雁は、必ず列をみだすものである」と教へてあることを思ひ出し、兵をやつてさがさせると、案のぢやう伏兵がゐるたの

義家が野に伏兵のゐるたのをさとつ

尋史上

弟義光が助けに來た

で、すぐさまこれをみな殺しにした。後で、義家は、部下のものに、もし兵法を學んでゐなかつたら、きつと危い目にあつてゐたにちがひない」と語つた。この頃、義家の弟の新羅三郎義光



源義家と義光兄弟の會つた

は、兄の身の上を氣づかつて、官をやめて、はるく京都から下つて來た。義家は、弟の眞心に感激の涙を流しながら、よく來てくれた。お前を見ると、まるで亡き父上に會つたやうな氣がする。といつて、たいへんよろこんだ。これから、二人は力を合はせて攻戦つたが、敵もなかなかよく防いで、長い間降参しなかつた。

剛臆の席を分けて兵士をばげまし

そこで、義家は、兵士の心をはげまさうと考へ、毎日兵士の戦ひ振を見てゐて、剛のものゝ臆病ものとの席を分け、戦がすんだ後、それゝの席に着かせることにした。そのため、誰でも剛のものゝの席に着かうと心がけて、皆いさんで戦つた。鎌倉權五郎景正が、あづかに十六歳の

尋史上

奥羽を平げ

後三年の役

少年の身でありながら、はなぐしく戦つて、後の世まで武勇のほまれをあげたのも、實にこの時のことであつた。

かうして年月がたつにつれて、武衡らは、兵糧が不足して、その勢もだんく衰へたので、とうく城を焼いて逃出した。義家は、追つかけてこれを斬つた。これから、奥羽地方はすつかりしづまつた。この時は、ちやうど第三十代堀河天皇の御代の初であつた。世にこの戦を後三年の役といつてゐる。戦がすんでから、義家は、戦功のあつたものに恩賞を與へられたいと、朝廷に願ひした。けれども、御許がなかつたので、自分の財産を分けて、部下の

源氏の勢が東國で盛になつた

將士に與へた。それから、義家はますます、武士の間に重んぜられて、源氏の勢は、取分け、東國の地方で盛になつた。

清和天皇 貞純親王 源經基 滿仲 賴信 賴義 義家 義親 爲義 義朝 義平

「義光」 「爲朝」

第十七 平氏の勃興

桓武平氏

源氏と並んで名高い武士は、平氏である。平氏は桓武天皇から出て、その勢は、一時、源氏におとつてゐたが、平忠盛の子清盛が出てから、大いに家名をあらはすやうになつた。

藤原賴長が崇徳上皇に

この頃、藤原氏の一門に權力の争があつた。左大臣藤原

尋史上

おすゝめした兵を擧げ

賴長は、まへくから兄の關白忠通に代らうと望んでゐたため、兄弟仲がよくなかつた。ちやうど、第七代後白河天皇の保元元年に、賴長は、天皇の御兄崇徳上皇の御子重仁親王を御位にお迎へして、自分が關白とならうと考へ、上皇におすゝめして兵を擧げようとし、義家の孫源爲義を味方に呼寄せた。すると、爲義はその子爲朝らをひきゐて上皇の御所にまゐつたが、爲義の長子義朝は、平清盛らと共に、天皇のお呼びだしを受け、皇居にまゐつてお味方申しあげた。  
爲朝は、爲義の八男で、體格は人なみすぐれて大きく、身のたけ七尺ばかりもあり、しかも力が強くて、弓がたい

爲朝の武勇

爲朝らがま  
けた

へん上手であつた。十三歳の時、九州に下つて、みづから  
鎮西八郎となへ、大勢の部下をひきゐて、わづか三年  
の間に九州をうち従へようとしたほどの剛のもので  
あつた。後に京都に歸つたのであるが、父に従つて上皇  
の御所にまゐつた時は、十八歳であつた。  
頼長は、爲朝を呼んで、軍の謀をたづねた。爲朝は、即座に、  
「私は長い間九州にゐて、二十度餘りも合戦をしました  
が、勝戦はいつも夜討にかぎつてゐました。それ故、今夜  
すぐ皇居におし寄せ、三方から火をつけて、一方から攻  
めたてたなら、きつと勝つにちがひありません。勇氣の  
ある敵は兄義朝だけです。それとて、私の矢一筋でた

尋史上  
尋史上

平清盛の勢  
が増してき  
たが

保元の亂

ふせます。まして、清盛らのへろく、矢ぐらゐ何でもあ  
りません。」ときつぱり答へて夜討をすゝめたが、頼長は  
これを用ひようとはしなかつた。ところが、義朝や清盛  
らが、早くも夜に乗じて攻寄せて來て、火を風上にはな  
つたので、味方の軍はたちまち苦戦におちいり、頼長は  
矢にあたつてたふれた。爲朝らは、勇を振るつて精いつ  
ぱい防ぎ戦つたが、とうく、敗れて、おそれ多くも上皇  
は讚岐におうつされになり、爲義は斬られ、爲朝は伊豆  
の大島に流された。世にこれを保元の亂といふのであ  
る。  
亂がをさまつた後、清盛や義朝は、それぐ、そのてがら

藤原信賴が  
義朝と合體  
した

義朝信賴が  
こむほんを  
おした

を賞せられたが、中でも清盛はその頃勢力のあつた藤原通憲と親しくして、ますます勢を増したので、義朝は心ひそかに不平に思つてゐた。たまく第七十に後白河上皇に願ひして、高い官を得ようとしたが、通憲にさまたげられたので、深く通憲をうらみ、ひそかに義朝と合體がつたいして、これを殺さうとたくらんでゐた。

平治元年、清盛は、子重盛らと、熊野の神社に参詣するため、京都を立つた。



二條天皇

尋史上

そこで、義朝・信賴は、清盛の不在につけこんで、いはかに兵を擧げて、通憲を討たうとした。通憲は、早くも身の危いのをさとつて、京都を逃出したが、途中で捕らはれて斬られた。この間に、義朝らは、おそれ多くも、上皇の御所を焼き、上皇と天皇とを皇居におしこめ申



平清盛の邸に幸行なつた



清盛の軍が  
義朝らを破  
つた

した。

清盛は、途中でこのさわぎを聞くと、重盛にすゝめられ  
て、急いで京都に引きかへした。さうして、ひそかに天皇  
を自分の邸にお迎へ申しあげたが、上皇もまた皇居を  
お逃出しになつた。天皇は清盛におほせつけて、義朝を  
お討たせになつた。義朝らは皇居にたてこもり、白旗を  
幾筋もくくうち立てて、勢盛に清盛の軍を待ちうけて  
ゐた。清盛はすぐ重盛らをやつてこれを攻めさせたが、  
平家の赤旗は折からの朝風にひらめいて、實に勇まし  
い進軍であつた。この時、重盛は、年號は平治で、土地は平  
安、その上われらは平氏である。この敵はきつと平ぐに

尋史上  
尋史上

重盛義平の  
決戦

平治の亂

ちがひない」といつて、大いに兵士をはげました。重盛が  
敵を破つて皇居に攻入り、紫宸殿の前に來た時、義朝の  
長子義平は、馬を走らせて迎へ戦ひ、左近櫻や右近橋を  
めぐつて勢するどく追ひかけた。重盛はかなはないで  
引退いた。義朝は、平氏の軍が逃出したのを見て、たち  
に兵をひきゐて追つかけたが、かへつて敗れ、退かうと  
する時には、皇居ははや平氏の軍に占領せられてゐた。  
義朝は、そこで、東國に走らうとしたが、途中、尾張の國で  
家來に殺された。また信賴や義平らも捕らはれて斬ら  
れた。世にこれを平治の亂といふのである。

桓武天皇—葛原親王—高見王—平高望—國香—貞盛—……—忠盛—清盛—重盛—維盛  
 良將—將門—宗盛—經盛—敦盛

第十八 平重盛

源氏が衰へ  
平氏が盛になつた

保元平治の二度の亂によつて、長い間勢があつた源氏はすつかり衰へ、これにひきかへ、平氏はしだいに盛になつた。

平氏が全盛  
をきはめた

亂がをさまつて後、清盛の勢は日毎に加り、官や位もしきりに進み、平治の亂の後まだ十年もたゝないうちに、早くも太政大臣に任ぜられた。まもなく、これをやめて出家したので、人々から太政入道と呼ばれた。その一族

尋史上

清盛のわが  
ま

もそれぐ、高い官位にのぼり、一門の領地は三十國餘りにもわたつて、はては藤原氏にもまさるほど繁昌し、平氏でないものは、人でない」と、じまんするものさへあるやうになつた。

清盛は、勢の盛なのにかかせて、だんぐ、わがまゝなるまひが多くなつた。後白河上皇はこれをおさへようと考へになつたが、御心のやうにならなかつたので、とろく、御髪をそつて法皇におなりになつた。そこで、法皇の近臣たちの中で、この有様をなげく人々は、僧俊寛の鹿谷の別莊により集つて、ひそかに平氏をほろぼさうと相談してゐた。清盛は、これを知つて大いに怒り、

重盛が父を  
諫めた

その人々を捕らへて、すぐ斬り殺さうとした。重盛は、おとなしくして、しかも忠孝の心の深い人であるから、私の怨で役人を殺すのはよくありません。殊に、わが家は、今が最も勢の盛な時ですから、なほさら善い行をして、子孫が榮えるやうにしていたゞかねばなりません。たとひお氣に入らないことがあつても、決してわがまゝなことをなさらないで、どうか子孫のためと思はれて、がまんしていたゞきたいものです。」と、涙を流して父を諫めた。

清盛の不忠

けれども、清盛の立腹はなほやまず、おそれ多くも法皇をもおしこめ申さうとして、一族を呼寄せたので、人々

尋史上

尋史上

また重盛が  
父を諫めた

は皆武装してその邸に集つた。ところが、重盛ひとりには、ふだんの装束のまゝで、おくれて來た。弟の宗盛がこれを見て、そつと袖をひいて、「これほどの大事な場合に、なぜ武装をなさらないのですか。父上も早くから鎧を着てゐられますぞ。」と注意した。すると、重盛は、「大事とは何事か。いつたい朝敵はどこにゐるのか。自分は近衛大將であるから、朝廷の大事でないかぎり、めつたに武装は出來ない。」ときつく戒めた。清盛はこれを聞いて恥づかしく思つたが、今更鎧をぬぐ暇もないので、急いで法衣を引つかけて重盛に會ひ、わざとおちついた振りをしてゐた。けれども、鎧の金物は、襟の間からちらく」と見

えてゐた。重盛は、はらくと涙を流しながら、恩を知つてこそ人といへるので、知らないものは、鳥やけだものと同じです。恩の中でも、一ばん重いのは君の御恩です。まして、わが家は桓武天皇の御末でありながら、中頃たいへん衰へてゐたところ、父上になつて大いに立身出世せられ、われくのやうなおろかなものまでも高い官位をいたゞいてゐるのは、これ全く君の御恩ではありませんか。今、この御恩を忘れて、天皇の御威光をかりまじ申すやうなことがあつては、たちまち神罰を受けて、一族はやがてほろびてしまふでせう。それでも、なほ父上がお聞入れなさないなら、私は、兵をひきゐて法

尋史上

尋史上

同の為素一子

父の御恩

申すも一子

うねこ

皇をお守りせねばなりません。しかしまた、父上にてむかふことも、子として私には堪へられません。それ故、父上がどうしてもこの企を成しとげようとなさるなら、

重盛

重盛の兵



平重盛が父清盛の不忠を諫めるため

重盛は忠孝の道を全うした

まづ私の首をはねてからにして下さい。と、真心こめて諫めたので、さすがの清盛も、しばらくは、思ひとゞまるやうになつた。重盛のやうな人こそ、まことに忠孝の道を全うしたりつばな人といふべきである。

第十九 武家政治の起

清盛がわがまゝをきはめた

平重盛は、日頃、父清盛のわがまゝを心配してゐたが、不幸にも重い病にかゝり、父にさきだつてなくなつた。それからは、清盛は誰はゝかるところなく、ますますわがまゝなふるまひをし、おそれ多くも後白河法皇をおしこめ申すやうなことをした。源頼政は、この有様を見て

源頼政が兵を擧げた

尋史上

源頼朝が兵を起した

大いになげき、どうかして平氏をほろぼして法皇をおすくひ申しあげたいと考へた。そこで、法皇の御子以仁王をいたゞいて兵を擧げようとはかり、王のいひつけを國々の源氏に傳へた。ところが、兵士がまだ集らないうちに、頼政は宇治の戦にまけて自殺し、王も矢にあたつてなくなられた。けれども、これから源頼朝をはじめ、國々にかくれてゐた源氏は、王のいひつけに従つて、一度に奮ひたつた。

頼朝は義朝の子である。平治の亂の後、十四歳の時伊豆に流されてから、二十年餘りの長い間、その地の豪族北條時政の世話になつて、しづかに回復の時期を待つて

ゐた。そこへ、以仁王からのいひつけを受けたので、時政らと共にまつさきに兵を起した。東國には、かねてから源氏に味方する武士が多かつたので、頼朝はそれらの人々を従へて、早くもその地方を平げ、つひに鎌倉を根據とした。

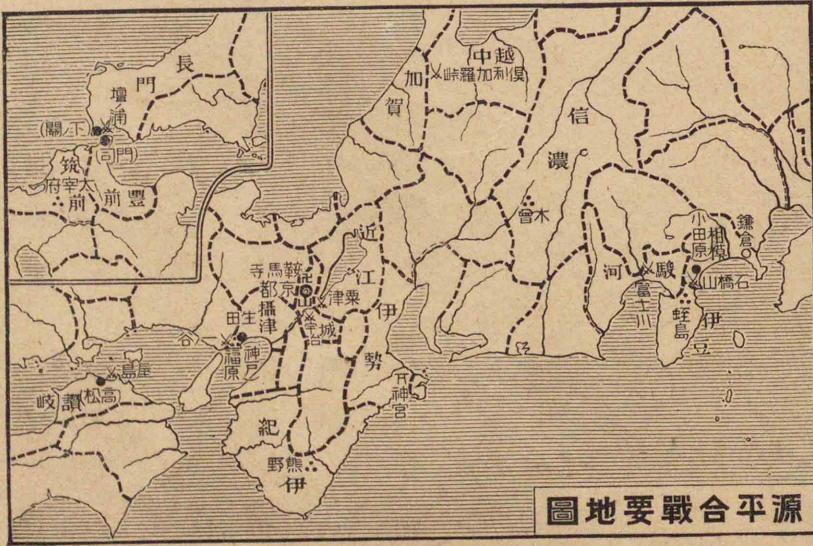
富士川の對陣

清盛は大いに驚いて、すぐ孫の維盛をやつて頼朝を討たせた。頼朝は、大兵をひきゐて駿河に進み、平氏の軍と富士川をはさんで陣を取つた。ある夜、源氏の一隊がこつそり平氏の軍の後へ廻らうとしたところ、あたりの沼にゐたたくさんの水鳥が、びつくりして一度にばつと飛立つた。平氏の軍は、その羽音に、敵兵が大勢攻寄せ

尋史上

源義經がたづねて來た

て來たものと思ひこみ、弓矢を投げすてて逃げかへつた。けれども、頼朝はこれを追つかけないで、なほこの上とも東國を固めておかうと考へ、兵士をまとめて鎌倉に引きかへさうとした。ちやうどこの時、弟の義經が、はるく奥州から頼朝をたづねて來た。もとく、義經は、平治の亂の後、幼い身で鞍馬寺にあづけ



源平合戦要地圖

源義仲が兵を起した

られたが、ある日、寺でわが家の系圖を見て、はじめてりつばな家柄であることを知り、いつかは平氏をほろぼさうと考へ、これから奮發して學問や武藝にはげんだ。その後、十六歳の時、奥州の平泉に下つて、その地方の豪族藤原秀衡の家にかくれてゐた。それが、今や頼朝が兵を起したと聞いて、兄を助けるため急いで上つて來たのであつた。頼朝は、義經に會つてたいへんよろこび、先祖の義家と義光が兄弟對面の昔話をして、弟の手を取つてうれし泣きに泣いたといふことである。頼朝の從弟義仲は、さきに二歳の時父に死別れてから、信濃の木曾山中で育つたのであるが、頼朝と同時に、兵

尋史止

平氏の都お

義仲がそむいて殺され

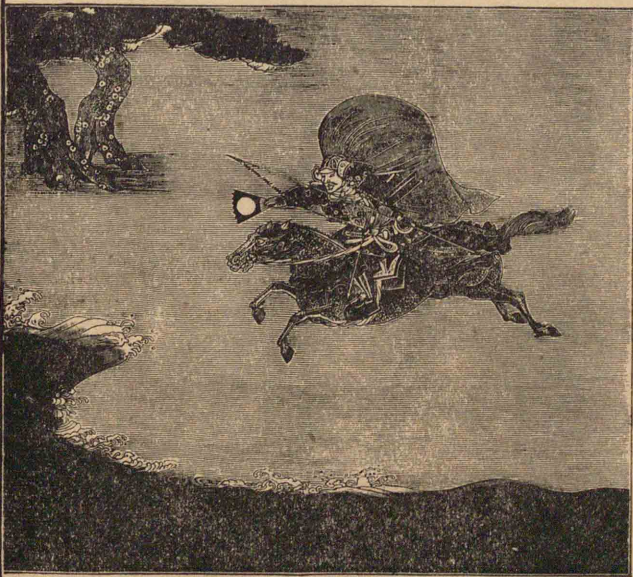
を起した。さうして、信濃から北國に攻入つて、越中の俱利加羅谷で、維盛の大軍をさんぐにうち破り、ひといきに京都へ攻上つた。この時、清盛ははや病死してゐたので、その子の宗盛が、一族と共に、第八十代安徳天皇をいただいて西國へおちて行つた。

それに入れ代つて、義仲は京都に入り、後白河法皇から平氏を討てとのおほせを受けた。けれども、勢にまかせ、て亂暴な行が多く、しまひには法皇にそむいて、その御所を襲ふやうなことでした。そこで、頼朝は、弟の範頼、義經を京都にやつて、これを討たせた。この時、佐々木高綱と梶原景季とは、めいゝく、頼朝からいたゞいた名馬

一谷の戦

にうち乗つて、宇治川の先陣を争つたが、高綱がまづ第一ばんに渡り着き、太勢の兵士がこれについで、大いに義仲の軍を破つた。義仲は、とうく、力つきて近江の粟津でうち死した。

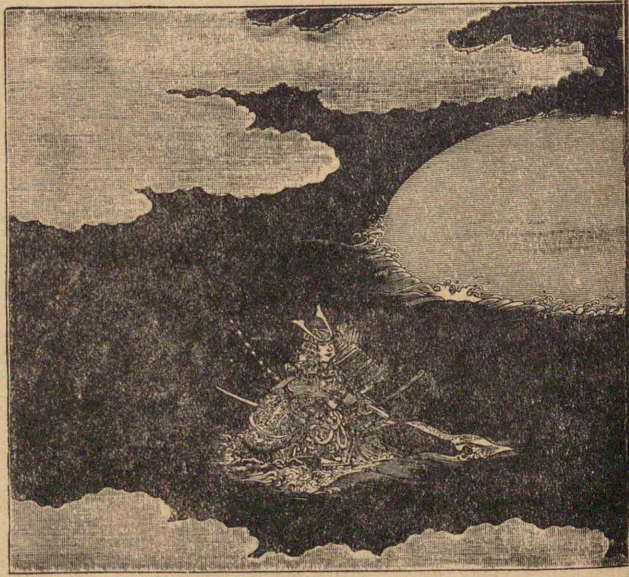
かうしてゐる間に、平氏はふたたび勢をもりかへして、京都を取りもどさうと、攝津の福原に引きかへしてきた。そこで、頼朝は、さらに範頼、義経にいひつけて、これを討たせた。二人は道



一谷

尊史 上

を分けて進み、範頼は生田森から、義経は一谷から、それぞれ福原に向つたが、義経が鴨越から敵の後に出て、不意に攻めたので、平氏の軍はたちまち敗北し、宗盛は、天皇をいたいて、讃岐の屋島に逃げた。時に、平敦盛は、たゞ一人舟に乗りおくれたので、馬に乗つたまゝ、海にかけ入り、味方の舟におよぎ着かうとしてゐた。すると、義経の部下の熊谷直實が、扇をあげて、これ



戦の



屋島の戦

を呼びかへした。敦盛は、少年ながらを、しくも、すぐ馬を引きかへして、直實と組打をしたが、力つきて首をうたれた。敦盛のやうな人こそ、まことにけなげな若武者といふべきであらう。

義経は、なほも、大風をものともせず、舟を出して四國に渡り、いち早く屋島の城に攻寄せて、これに火をつけた。ために、宗盛は、ふたたび天皇をいたゞいて、西へ走つた。この戦に、義経の部下の那須餘一は、あつばれ扇のななめを射て、譽をあげ、また奥州から義経にお供をして來た勇士佐藤繼信は、義経の身代となり、敵の矢にあたつて、忠烈な戦死をとげた。

事史上

壇浦の海戦

平氏がほろびた

頼朝が義経を殺させた

義経は、また、逃げゆく平氏を、長門の壇浦に追ひつめて、こゝで最後の決戦をした。平氏の軍はとろく、まけて、大將宗盛は、卑怯にも敵に捕らはれたが、その他の一族は皆戦死して、平氏はすつかりほろびてしまった。この時、天皇は、やうやく八歳の御幼少でいらつしやつたが、清盛の妻二位尼にだかれて、海におはいりになつた。まことにおそれ多い御事である。

義経は、かやうに、頼朝のために、平氏をほろぼして非常なてがらをたてたが、頼朝は、かへつて義経をにくんで近寄せず、はては殺させようとさへした。そこで、義経は、ふたたび平泉にのがれ、秀衡にたよつてゐたが、秀衡の

頼朝が奥州を平げた

死んだ後、その子の泰衡やすひらが、頼朝のいひつけに従つて義經を殺した。ところが、頼朝は、なほ泰衡が長い間義經をかくまつてゐたことを責めて、みづから大軍をひきゐて奥州を攻め、まもなく泰衡をもほろぼしてしまつた。これから、国内は、全く頼朝の威勢になびき従つた。けれども、頼朝は、平氏の人々がおごつたために、わづかの間にほろびたことに考へあはせ、清盛らのやうに高い官位にのぼつて、京都の人々と交ることを避け、鎌倉にゐて質素な生活をし、部下のものにも大いに儉約をすゝめた。ある時など、部下のものが、十枚餘りの着物を着かざつて頼朝の前に出ると、頼朝は、すぐ刀を取つて、その

頼朝の政治

尋史上一

着物のつまを切り、おごりをきびしく戒めたことがあつた。また、いたつた、いつた、も武藝をほげまし、富士の裾野をはじめ、所々にたびたび

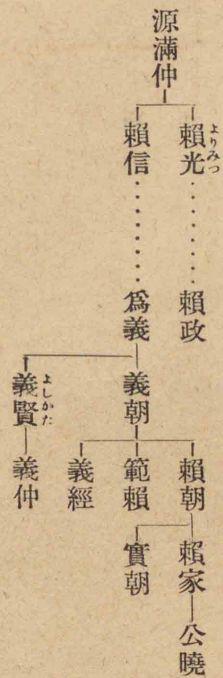


頼朝が富士の裾野で狩をよほした

頼朝が幕府を開いた  
征夷大將軍

武家政治の始

狩をもよほしたりして、武士の勇氣を養ふことに力をいれた。かやうにして、鎌倉の勢はいよく、強くなり、紀元一千八百五十二年(建久三年)に、頼朝は征夷大將軍に任ぜられて、とうく、天下の政治をとり行ふこととなつた。將軍が政治をとるところを、幕府といふのである。これから後およそ七百年の間、武家の政治がつゞき、おそれ多くも、朝廷の御威光はいよく、衰へられた。



尋史上

尋史上

第二十 後鳥羽上皇

後鳥羽上皇が長い間政治をおとりになつた

源氏がほろびて北條氏となつた

安徳天皇の御後は、第二十代後鳥羽天皇が御位にお即きになつたが、天皇は、御位をお譲りなさつてから、上皇として長い間政治をおとりになつた。その間に、御子の第十三代土御門天皇、第十四代順徳天皇や、御孫の第十五代仲恭天皇が、つぎつぎにお立ちになつた。

その頃、源頼朝は、すっかり國內の武士を従へて、勢が盛であつたが、もとく、疑深い性質で、とかく一族のものと仲がわるく、義經をほろぼした後は、また、範頼をも疑つて殺させてしまつたので、源氏の勢は、しぜんと衰へていつた。ところが、頼朝の舅の北條時政は、頼朝がはじ

めて兵を起した時から、これを助けて大いにはたらき、後には幕府の政治にもあづかつたので、その勢はたいへん強くなつた。それで、頼朝がなくなつた後、長子の頼家が將軍となると、まもなく時政のためにやめさせられて、頼家の弟實朝が職をついだ。頼家の子の僧公曉は、實朝を深く怨んで、實朝が鶴岡八幡宮に參詣した時、ひそかにうかゞひ寄つて、これを刺し殺した。さうして、公曉もまた、時政の子義時に殺された。これで、頼朝の子孫は全く絶えてしまつた。そこで、義時は、京都から頼朝の血筋を少しばかりひいてゐる幼主を迎へ、自分がその執權となつて幕府の實權を握り、思ふ存分にふるまふ

後鳥羽上皇  
が北條氏を  
討たせに  
なつた

やうになつた。

後鳥羽上皇は、御生まれつき嚴格な御方で、いつも日課をきめて、いろ／＼の御事をつぎ／＼に行はせられた。とひ、風が吹かうと雨が降らうと、決してこれをおとりやめなさるやうなことはなかつた。すべてに、このやうな御性質でいらつしやつたから、上皇は、かね／＼、幕府が勝手きまゝに天下の政治を行ふことをお怒りになつて、折さへあれば、政權を朝廷に取りもどさうとお考へになつてゐた。たま／＼、頼朝の子孫が絶えても、幕府の政治はもとのまゝである上に、義時はたび／＼、上皇のおほせにそむいたので、上皇は、仲恭天皇の承久三年

に、いよく、國々の武士を呼寄せて、義時をお討たせに  
なることとなつた。

承久の變

義時は、これを聞くとたいそう驚き、子の泰時やすときらにいひ  
つけて、大軍をひきゐて京都に上らせた。泰時らは、官軍  
を尾張・美濃・近江などの各地で破り、勢にまかせて京都  
に攻入つた。さうして、義時は、たゞちに、上皇にお味方申  
した人々を斬つたり流したりした。その上、おそれ多く  
も、後鳥羽上皇を隱岐かきに、順徳上皇を佐渡さだに、土御門上皇  
を土佐とさにおうつし申しあげ、また仲恭天皇を廢して、第八  
十六代後堀河天皇をお立て申した。世にこれを承久の變しやうきゆうのへんと  
いつてゐる。天皇の御心にそむいて、みだりに兵を擧げ

北條義時の  
不忠

て京都をさわがし、しかも、天皇を廢立はいりつ申したり、三上皇  
を遠い島々におうつし申したりしたことは、古今ここんに例ためし  
のない大事變だいじへんで、義時の不忠ふしう不義ふぎ、まことににくみても  
あまりありといふべきである。

六波羅府

かやうにして、後鳥羽上皇の御志もむだとなり、この後、  
北條氏は、一族のものをかはるゝ、京都の六波羅ろくはらに置  
いて、畿内きないや西國の政治を行はせ、その勢は、ますます、盛  
になるばかりであつた。その間、三上皇は、はるかに都の  
空をおしたひなされつゝ、つらい年月を遠い島々でお  
過すごしになつて、そのまゝ、おかくれになつた。取分け、後鳥  
羽上皇の隱岐の御所は、やつと雨風あめかぜをおしのぎになれ

隱岐の御所



隱岐の御所

るくらゐの假屋であつたので、しほ風のはげしく吹いてゐた時、

われこそは

新島守よ、

おきの海の

あらしなみ風

こゝろして吹け。

とおよみになつた。上皇は、十九年の長い間こゝにいらつしやつて、とう

とう御年六十でおかぐれになつた。これを佐渡の島で傳へ聞かせられた順徳上皇は、あけぐれ御涙にくれておいでになつたが、三年の後には、御みづから御食事を斷つて、おかくれになつた。まことに、申しあげやうもないおそれ多い御事である。

政子(頼朝の妻)

北條時政 義時 泰時 時氏 時頼 時宗 貞時 高時

第二十一 北條時宗

時宗の勇氣

北條義時は、不忠の行が多かつたが、時宗の代になると、たましく、建國このかた例のない外國の寇があり、時宗は非常な覺悟でこれにあたつたため、大いにわが國の

威力威力をあげることが出来た。時宗は時頼ときよりの子で、相模太郎さかといつた。豪氣がうきな生まれつきで、弓が上手であつた。ある時、將軍が、武人を呼寄せて弓を射させた。人々は、皆射そこなひはしないかとためらつてゐたが、わづかに十一歳の時宗は、少しも氣おくれするやうなことなく、馬に乗つて進み出で、たゞの一矢ひとやでみごとにま的に射あてて、大いに譽をあげたことがあつた。第九代龜山かめやま天皇の御代に、時宗は十八歳で執權となり、幕府の政治を行ふやうになつた。

蒙古がおこつてきた

これより前、支那の北の方に蒙古もうこといふ國がおこり、しきりにあたりの國々を攻取つて、西は今のロシアの西

尋史上

時宗が蒙古の使を追ひかへした

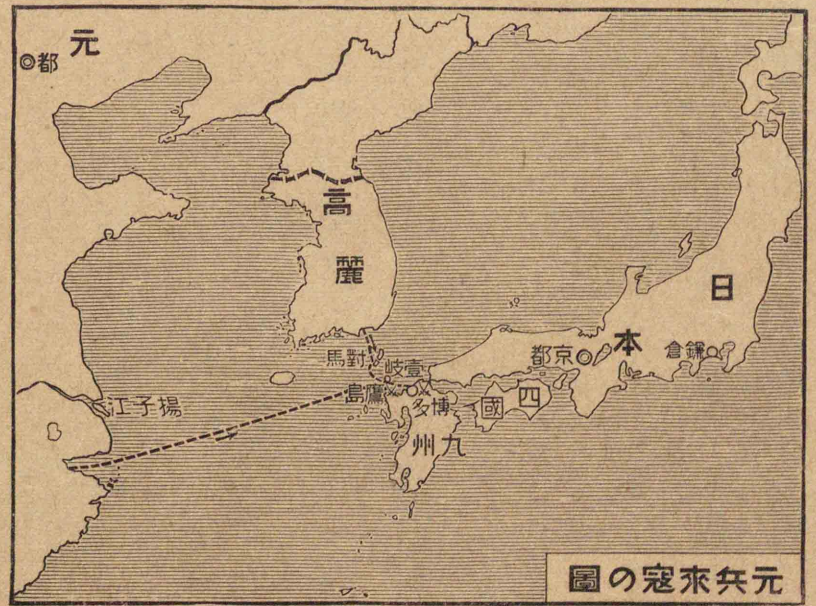
文永の役

南部から、東は朝鮮半島にまで勢をのばしてきた。時に、半島では、新羅はすでにほろびて、高麗かうらいがこれに代つてゐた。蒙古王は、早くも高麗を従へ、なほもわが國を従へようとして、高麗王にいひつけて無禮むらいな手紙を送らせてきた。時宗は、これを見ると大いに怒つて、その使を追ひかへしてしまつた。

その後、まもなく、蒙古は支那の大部分を攻取つて、國の名を元げんととなへた。第九代後宇多ごう天皇の文永ぶんえい十一年に、元は、高麗の軍を合はせ、四萬の大軍で、對馬や壹岐いさきに寇し、たちまち筑前におし寄せて、博多はかた附近に上陸した。わが

時宗の決心

將士は、少しも恐れず、死にものぐるひになつて戦ひ、よく防いだので、元の軍はとうとう逃去つた。世にこれを文永の役といふのである。



尋史上

弘安の役

の使を斬り殺させた。その上、博多灣の海岸に石壘を築き、敵軍が攻めてくれば、いつでも迎へうてるやうに用意をさせた。

かうしてゐるうちに、元はすっかり支那を従へ、その勢で弘安四年に、四萬の兵を朝鮮半島からふたたび筑前にさし向け、別に支那からは十萬の大兵を出した。朝鮮半島から來た敵兵は、壹岐ををかして博多に攻寄せ、來たが、菊池武房や河野通有、竹崎季長らの勇士は、石壘にたてこもつて防いだり、勇敢にも敵艦へ斬りこんだりして、大いにこれを苦しめた。そのうち、支那から來た大軍が、これといつしよになつて、今にも攻寄せ、來よ



うとした。その時にはかに神風が吹きおこつて、敵艦の大部分は沈没し、溺れて死ぬものは數へきれないくらゐであつた。多くの大將らは、われ先にと逃去り、取残された兵士は、肥前の鷹島に集つたが、それも殺されたり、捕らへられたり



弘安の役

尋史上

一一八

上下が心を  
合はせて元寇  
をうちは

して、その軍は全くほろびてしまつた。世にこれを弘安の役といふのである。

この元寇は、實にわが國はじめの大難であつた。それ故、龜山上皇は、たいそう御心配になり、おそれ多くも、たふとい御身を以て國難にお代りなさらうと、伊勢の神宮にお祈りになつた。また、時宗は、非常な決心で事にあたり、國民は皆一體となつて奮ひおこり、上下よく心を合はせて、とう／＼この強敵を追ひはらふことが出来たのである。これからは、元は二度とわが國をうかぶふやうなことはなかつた。かたじけなくも、第百二代明治天皇は、時宗の大功をお褒めになつて、特に従一位をお贈

一一九

りになつた。

第二十二 後醍醐天皇

天皇が政權  
を取りもど  
さうとなさ  
つた

弘安の役から四十年ばかりたつて、第九十代後醍醐天皇が御位にお即きになつた。天皇は、後宇多天皇の御子で、聰明な御生まれつきであらせられたから、お小さい時から、御祖父の龜山上皇にたいそうかはいがられていらつしやつた。また學者を召して、ひろく學問をお修めになり、政治に御心をお用ひになつて、早くから鎌倉幕府のわがまゝなふるまひをお怒りになつてゐたから、後鳥羽上皇の御志をついで、政權を朝廷に取りもどさう

尋史上

とお考へになつた。

北條高時

この頃、幕府では、北條時宗の孫の高時が政治を行つてゐたが、おろかな生まれつきで、晝となく夜となく宴會をもよほしたり、數千匹の犬を集めて、そのかみ合を見物したりして、少しも政治に力をいれなかつたため、たいへん人望を失つた。そこで、天皇は、かねてからの御志をしとげるのはこの時である、と、ひそかに武士をお召しになつた。ところが、この事が、いつのまにか、鎌倉にもれ聞えたので、高時は大いに驚き、急に兵を京都へ上らせて來た。天皇は、これをお避けになつて、山城の笠置山に行幸をなさつた。

天皇が笠置  
山に行幸を  
なさつた

楠木正成が  
行在所にま  
おつた

河内の國金剛山の麓に住んでゐた楠木正成は、天皇の御召によつて、まつさきに笠置の行在所にまゐつた。さうして、天皇に拜謁して、賊軍がどんなに強くても、謀をめぐらせば、これをうち破ることは、さほどむづかしくはありません。けれども、勝敗は軍の習でありませうから、たまには敗れることがあつても、決して御心配下さいますな。正成一人をほ生きてゐるとお聞きなまつてゐる間は、御運はいつかお開けになるものと、御心を安らかにしていらつしやるやうお願い申します。と、力強く申しあげた。それから、河内に歸つて赤坂に城を築き、天皇をお迎へ申さうとしたが、まもなく賊軍が笠置をお

尋史上

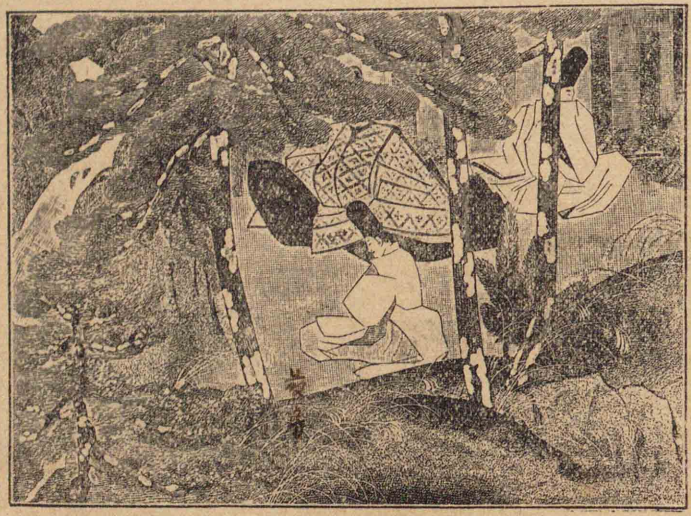
尋史上

天皇が隠岐  
におうつた  
れになつた

大正三年  
五月廿九日  
張、  
安田鞠彦  
筆

としいれてしまつた。

天皇は、藤原藤房らに従へられ、御徒歩で笠置をおのが



笠置おち

れになつたが、その途中の御難儀は、まことにおそれ多く、晝はかくれ、夜になると、あてもなくさまよはせられる御有様であつた。お供の藤房らは、三日の間も、食事をしなかつたため、身も心もすつかり疲れはてて、しばらく木かげに休んでゐた。その時、こず忍

の露がおちて、天皇の御衣をぬらしたので、天皇は、

さしてゆく笠置の山を出でしより、

あめが下したにはかくれがもなし。

とおよみになつた。藤房は、もつたいなさに、涙をおさへながら、

いかにせん頼むかげとて立寄れば、

なほ袖ぬらす松のしたつゆ。

とお答へ申しあげた。まもなく、天皇は、賊兵に捕らはれて、隠岐の島におうつされになつた。

笠置が破れた後、賊軍は赤坂城を圍んで、とう／＼これをおとし入れてしまつた。正成は、そこをのがれて、しば

護良親王が  
吉野にたて  
こもられた

尋史上

尋史上

正成が千早  
城にたてこ  
もつた

らくかくれてゐたが、ほどなく、ふたたび兵を集めて、城を金剛山の千早ちばに築いた。天皇の御子護良親王もりながもまた、吉野よしのにたてこもつて、義兵を四方にお募つりになつた。けれども、すぐ賊の大軍がおし寄せて來たので、吉野がまづおちいつた。この時、村上義光むらかみよしてるが親王の御鎧をいたゞき、これを着て、みづから親王といつはつて自害したので、親王はやつと危い難をおのがれになつた。一方、正成は、わづかの兵をひきゐて千早城にたてこもり、さまざまに謀をめぐらして、たび／＼賊軍をなやました。この間に、國々では、親王の御命令を受けて、勤王きんおうの軍を起すものが多くなつた。

天皇が伯耆に渡つて名和長年をお召しになつた

足利尊氏ら六波羅をほろぼした

天皇は、この有様をお聞きになると、ひそかに隠岐から伯耆に渡つて、その地の豪族名和長年をお召しになつた。長年は、天皇のおほせを受けて大いに感激した。ち一族を呼集めてこの事を傳へた。皆いづれも奮ひたつて、この度、天皇のおほせをいたゞいたことは、この上もないわが家の名譽である。天皇の御ためには、たとひ屍を戦場にさらしても、名を後の世に残さねばならぬ。急いでお迎へにまゐらう。といつて、大急ぎで行宮を船上山に造り、こゝに天皇をお迎へして、兵を集めてお守り申しあげた。

そこで、天皇は、大勢の大將をやつて、六波羅を攻めさせ

尋史上

新田義貞が鎌倉をおとし入れた

られた。高時は、これを聞いて大いに驚き、足利尊氏らにいひつけて、急いで兵をひきゐて京都へ上らせた。ところが、尊氏は源義家の子孫であるから、かねぐち北條氏の下にゐることを不平に思つてゐた。それ故、この時にはかに朝廷に従ひ、勤王の人々と力を合はせて、賊軍を討ち、とゞく。六波羅をおとし入れた。よつて、天皇は、さつそく船上山をお出ましになり、京都へお向ひになつた。

新田義貞もまた、義家の子孫である。さきに、賊軍に従つて千早城を攻めたが、まへぐちから、朝廷にお味方しよると考へてゐた。そこで、ひそかに護良親王の御命令を

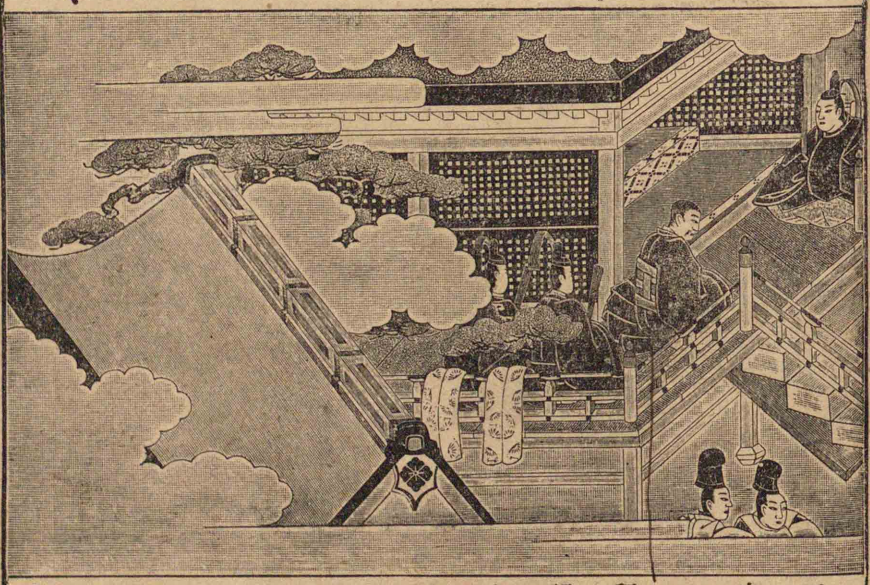
受けるかると、病といつはつて  
 上野かうづけに歸り、義兵を起した。  
 さうして、進んで鎌倉を攻  
 め、稲村崎いなむらがさきからうち入つて、  
 高時らを破つて北條氏を  
 ほろぼした。頼朝以來百四  
 十年餘りつゞいた鎌倉幕  
 府は、こゝにほろびてしま  
 つた。  
つ、松浦にせん、  
今、  
 船上山から京都へ向はせ  
 られた天皇が、兵庫にお着



神かみ、(天)、草、仙、寺  
 繪巻ニア  
 神かみ、油、着、寺  
 う行在所トシテ  
 三宮ニ御宿泊  
 置所、  
 楠、  
 木、  
 正、  
 成、  
 が、  
 後、  
 醍、  
 醐、  
 水、

福壽寺ふくじゆ、二、丁、何、境、大  
 今、八、再、建、ノ、寺

きになつた時、義貞の使が  
 來て、鎌倉を平げたことを  
 申しあげた。正成も、また、部  
 下をひきゐて兵庫に來た。  
 天皇は、正成を御そば近く  
 にお召しになつて、大いに  
 そのてがらをお褒めにな  
 り、正成を前驅ぜんぐとして京都  
 におかへりになつた。時に  
 紀元一千九百九十三年(元)  
 弘三年(こ)であつた。これから、



天、  
 皇、  
 に、  
 拜、  
 謁、  
 し、  
 た、

建武の中興

天皇は、御みづから天下の政治を行はせられることになつた。さうして、護良親王は、その御てがらによつて、征夷大將軍におなりになり、尊氏・義貞・正成・長年らも、皆それぞれあつく賞せられた。かうして、政權はふたたび昔のやうに朝廷にかへつた。この時、年號が建武と改つたので、世にこれを建武の中興といふのである。

源義家—義國—新田義重—朝氏—義貞—義顯  
 足利義康—貞氏—尊氏—義詮—義満  
 直義

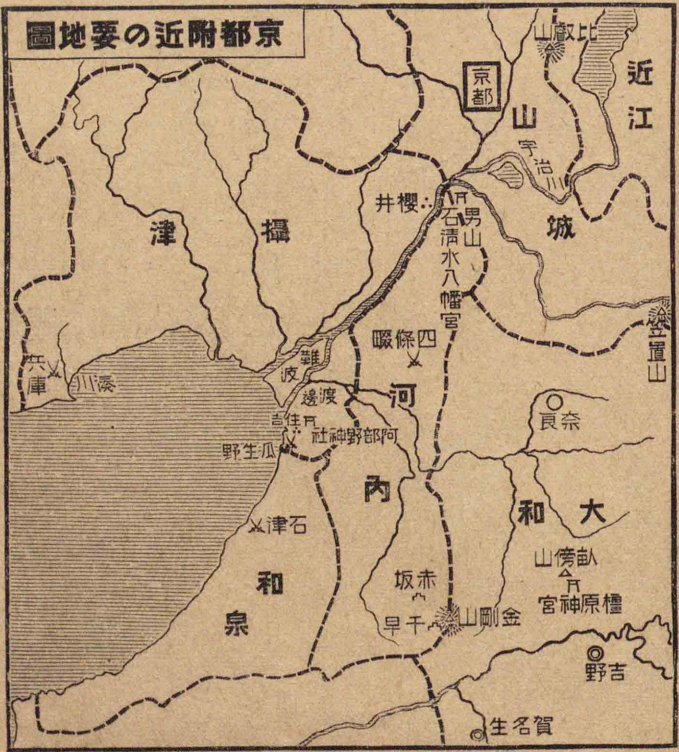
第二十三 楠木正成

尊氏の野心

鎌倉幕府が倒れて政權が朝廷にかへつてから、朝廷の

尋史上

御威光はふたたび盛になつた。けれども、武士の中には、長い間幕府の政治になれてゐたため、君臣の大義を忘れ、朝廷の賞罰に不平をもち、かへつて武家の政治をよるこぶものが少くなかつた。足利尊氏は、かねぐゝ將軍になりたいと望んでゐたので、これら不平の武士を、ひそかに



護良親王が  
害されなさ  
つた

手なづけてゐた。

護良親王は、早くも尊氏の野心をさとつて、これを除か  
うとせられたが、かへつて尊氏に讒言せられ、これがた  
めに鎌倉に送られておしこめられたまうた。この頃、尊  
氏の弟の直義がその地を治めてゐたが、たまく、北條  
高時の子の時行が兵を起して、鎌倉を取りもどさうと  
した。この戦に、直義は敗れて、鎌倉を逃出したが、その時、  
おそれ多くも人をやつて親王を害したてまつつた。親  
王の御年は、時にまだ二十八であつた。鎌倉宮は、親王を  
おまつり申しあげたお社である。

鎌倉宮

尊氏がそむ  
いた

尊氏は、征夷大將軍となつて東國を治めたいと、朝廷に

尋史上  
尋史上

尊氏兄弟が  
九州に走つ  
た

お願い申したが、まだその御許もないうちに、勝手に鎌  
倉に下つて時行をうち破り、まもなく、その地に據つて  
朝廷にそむいた。天皇は、義貞をやつて、これをお討たせ  
になつた。ところが、官軍は竹下や箱根の戦に敗れて退  
いたので、尊氏は、直義と共に、京都へ攻上つて來た。天皇  
は、これを避けて、しばし比叡山にお出ましになつた。け  
れども、この頃、天皇の御子義良親王をいたゞいて奥州  
を守つてゐた北畠顯家も、また朝廷の御命令を受け、親  
王のお供をして、兵をひきゐて京都へ上つて來た。さう  
して、正成や義貞らと力を合はせて大いに賊軍を破り、  
尊氏や直義を西國へ走らせたので、天皇はふたたび京



尊氏兄弟が  
京都に攻上  
つて来た

正成が櫻井  
の驛で正行  
をさとした

都におかへりになつた。  
尊氏は九州にゐて勢をもりかへし、直義と共に海陸兩軍をひきゐて、京都へ攻上つて来た。そこで、義貞がこれを兵庫で防がうとしたが、賊の勢がたいへん盛なので、天皇は、正成をやつて、義貞を助けさせられることになつた。この時、正成は、しばらく賊の勢を避け、その勢が衰へるのを待つて、一度にうちほろぼさうといふ謀を建てたが、用ひられなかつた。それ故、正成は、おほせに従つて、たちちに京都を立つた。途中、櫻井の驛に着いた時、かねて天皇からいたゞいてゐた菊水の刀を、かたみとして子の正行に與へ、この度の合戦には、味方が勝つこと

尋史上

素直物  
聖徳太子  
磯田長  
中

此の理  
はハ  
損



櫻井の驛で正成の子の別

はむづかしい。自分が戦死した後は、天下は足利氏のものとならうけれども、そなたは、どんなつらい目にあつても、自分に代つて忠義の志を全うしても、自らひたい。これが何よりの孝行であるぞ。と、ねんごろにさ

正成が湊川  
で戦死した

として河内へ歸らせた。それから進んで湊川に陣を取り、直義の陸軍と戦つたが、その間に、尊氏の海軍も上陸して、後から攻めかゝつて來た。正成は大いに奮戦した。けれども、小勢で、かやうに前後に大敵を受けては、どうすることも出來ず、部下はたいいてい戦死し、正成も身に十一箇所の傷を受けた。そこで、もはやこれまでと覺悟して、湊川の近くにある民家にはいつて自害しようとした。この時、正成は弟の正季に向つて、最期にのぞんで、何か願ふことはないか。とたづねた。正季は、たゞちに七度人間に生まれかはつて、あくまでも朝敵をほろぼしたい。たゞそればかりが願である。と答へた。正成は、いか

尋史上

湊川神社

古今忠臣の  
かゞみ

にも満足さうににっこり笑ひ、自分もさう思つてゐるぞ。といつて、兄弟互に刺しあつて死んだ。時に、正成は年四十三であつた。今、正成をまつた神戸の湊川神社のあるところには、正成が戦死した地で、境内には、徳川光圀の建てた「嗚呼忠臣楠子之墓」としてした碑がある。實に、正成は古今忠臣のかゞみである。わが國民は、皆、正成のやうな真心を以て、大いに御國のためにつくさねばならぬ。

名和長年が  
戦死した

第二十四 新田義貞

湊川の戦に、新田義貞も敗れて京都に退いたので、天皇

後醍醐天皇  
が吉野に行  
宮をお定め  
になつた

はふたたび比叡山へ行幸をなされ、尊氏は進んで京都に入つた。官軍は、これを取りかへさうとしたが、失敗して、名和長年らは戦死した。長年は、今、伯耆の名和神社にまつてある。  
尊氏は京都に入ると、賊の名を避けるために、豊仁親王を立てて天皇と申しあげてゐた。けれども、ほどなく、いつはつて朝廷に従ふやうに見せかけ、後醍醐天皇に京都へおかへりなされるやうに願ひ申しあげた。天皇は、かりにその願をお許しになつて、京都におかへりになつたが、まもなく神器を御身にそへて、ひそかに吉野に行幸をなされ、行宮をこゝにお定めになつた。

尋史上

義貞が北國  
に向つた

さきに、天皇は、比叡山の行宮で、義貞を召して、北國におもむいて、回復をはかるやう、おほせつけになつた。義貞涙を流して感激し、すぐ一族のものといつしよに、皇太子恒良親王と皇子尊良親王とをいたゞいて、北國に向つた。途中、木目峠



新田義貞が北國に向つた

を越えたが、折あしく吹雪がはげしくて行軍の苦しみは非常なものであつた。取分け、河野の一族は、にはかに敵に出あつたので、戦はうとしたが、馬は雪にこぼえて進まず、兵士は指をおとして弓を引くことが出来ず、進退きはまつて、主従三百人餘り、一人も残らず討死した。義貞はやうく、越前の敦賀に着き、金崎城にたてこもつた。ところが、こゝもほどなく賊軍に圍まれて、城が危くなつたので、子の義顯を残して城を守らせ、自分は柚山に行つて兵を募つた。けれども、その間に、兵糧がなくなつて、城がおちいり、尊良親王は義顯らと共に御自害なさつた。皇太子は、捕らはれて京都へ送られなかつた。

尋史上

義貞が藤島で戦死した

が、とうく、尊氏のために害せられたまうた。

義貞は、かういふふしあはせにあつても、少しもくじけず、柚山から奮ひたつて、たびく、賊軍と戦つてこれを破つた。その後、藤島の戦に、賊の勢が強くて、官軍は今にも敗れさりになつてきたので、わづかに五十騎を従へて、急いでこれをすくひに行つた。途中、三百騎の敵兵に出あひ、大いに奮戦したが、乗つてゐた馬が、矢にあたつて泥田の中に倒れたので、義貞はすぐ起きあがらうとする、その時、運わるく、飛んで來た一筋の矢が額にあつた。さすがの義貞も、もはやこれまでと覺悟して、みづから首をはねて、いさぎよく死んだ。時に、年三十八で

あつた。これから、北國の官軍は、中心とたのむ大將を失つて、全く衰へてしまつた。今、福井の藤島神社には、義貞がまつられてゐる。

第二十五 北畠親房と楠木正行

新田義貞が戦死する少し前に、北畠顯家もまた戦死した。さきに、顯家は、尊氏を九州に走らせてから後、ふたたび義良親王をいたゞいて陸奥に下り、靈山城にたてこもつてゐたが、天皇が吉野に行幸をなさつたことを知ると、また親王をいたゞいて京都へ向ひ、所々で戦つて敵を破つた。けれども、その兵は、たびくの戦にたいへ

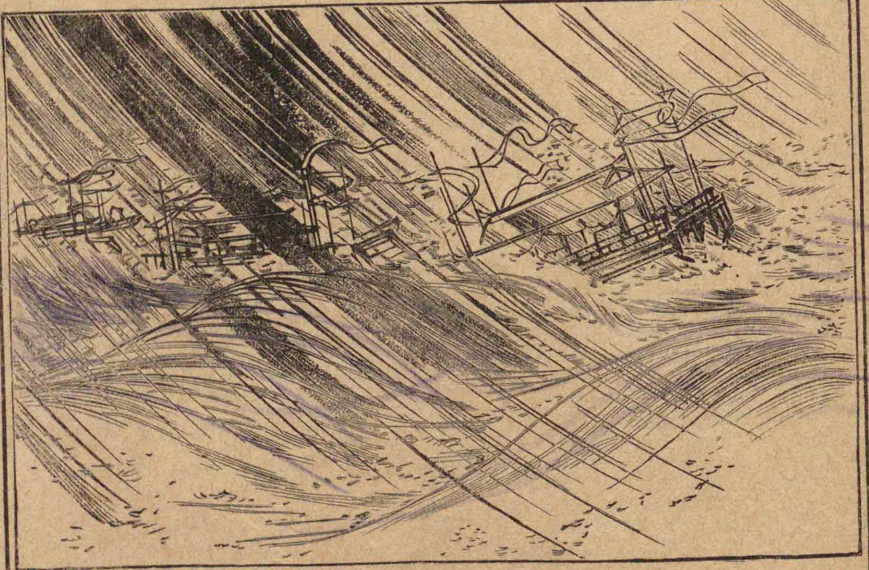
北畠顯家が戦死した

尋史上

親房らが海路で東國へ向つた

ん疲れて、都に攻入ることが出来ず、顯家は和泉の石津で戦死したのである。時に、年やうやく二十一であつた。

かういふやうに、顯家や義貞らの忠臣が、つぎつぎに戦死したが、後醍醐天皇は、御志いよく、堅く、顯家の父親房らに、いひつけて、また義良親王をいたゞいて



北畠親房ら上海で大風にあつた

後醍醐天皇  
が  
お  
か  
く  
れ  
に  
な  
つ  
た

親房が神皇  
正統記を  
あ  
ら  
は  
し  
た

陸奥に下らせ、官軍の勢を取りもどさせようとおはかりになつた。親房らは、伊勢から海路で東へ向つたが、途中で大風にあひ、親房の船は常陸に着き、親王の御船は伊勢に吹きもどされたので、親王はそのまま、吉野へお歸りになつた。たまく、天皇は御病におかゝりになつた。この時、まだ國々に朝敵がはびこつて、世の中がさわがしいので、これをたいそう残念にお思ひになりながら、とうく、行宮でおかくれになつた。そこで、義良親王が御位をおうけつぎになつた。第九十七代後村上天皇と申しあげる。

その頃、東國の武士はたいいてい賊に味方してゐたので、

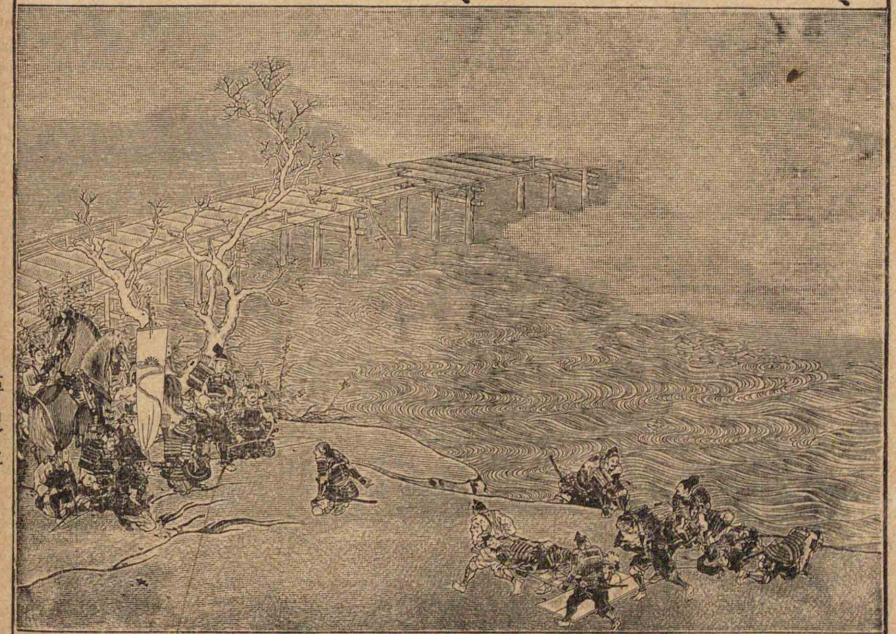
尋史上

楠木正行が  
四條で戦  
死した

親房は陸奥に進むことが出来ず、常陸の關城で賊兵に圍まれた。親房は、晝夜賊を討つ謀をめぐらしながら、そのひま／＼に、神皇正統記をあらはし、天照大神から後村上天皇に至るまでの御血統の由來を述べて、君臣の大義を明らかにした。そのうち、まもなく城がおちいつたので、親房はのがれて吉野に歸り、これから楠木正行らと力を合はせて、とも／＼に天皇をお助け申しあげた。

正行は、さきに十一歳の時、櫻井の驛で父に別れ、國に歸つてからは、よく父の遺言を守つて、つね／＼朝敵をほろぼさうと心がけて、いつしやうけんめいにはげんだ。

やうやく成人してから、後村上天皇にお仕へして、たびく、賊軍と戦つて、これをうち破つた。取分け、攝津の瓜生野の戦では、賊兵が大いに敗れ、先を争つて逃げる時、あわてて川におちて流れるものが五百人餘りもあつた。正行は、これを見てたいへん氣の毒に思



楠木正行が賊兵をたつはたい

正行

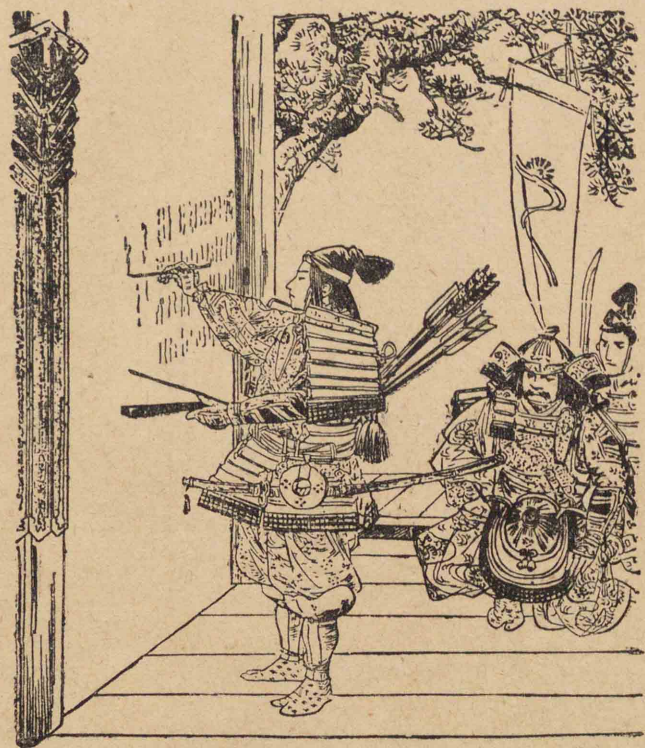
尋史上

一四六

ひ、部下のものにいひつけて、これをすくはせ、一々親切にいたはつて送りかへした。かういふ有様で、官軍の勢はますます、強くなつて、今にも京都へ迫らうとした。尊氏は大いに恐れ、高師直にいひつけて、急ぎ大兵をひきゐて正行に當らせた。そこで、正行は、たち一族百四十人ばかりをつれて、吉野にまゐつて、天皇に拜謁し、また後醍醐天皇の御陵に参拜して、御暇乞を申し、如意輪堂の壁板に一族の名を書きつらねて、その末に、かへらじとかねて思へば梓弓、なき數にいる名をぞとむる。といふ歌をしるし、死を決して河内に歸り、賊軍と大い

一四七

に四條畷で戦った。この時、正行はどうかして師直を討



楠木正行が如意輪堂に書きため

取らうと考へた  
びたびその陣に  
迫つたが、身に多  
くの矢きずを受  
け、力もつきはて  
たので、とうく  
弟の正時と刺し  
ちがへて死んだ。  
時に、正行は年や

りやく二十三であつた。前年、正行にすくはれた賊兵は、

正行の忠孝  
兩全

親房がなく  
なつた

深くその恩に感じ、正行に従つてこの戦でことごとく討死した。實に正行のやうな人こそ、勇も仁もある、りつぱな武士で、忠孝の道を全うした人といはねばならぬ。かうして、楠木氏は、正行の死んだ後も、その一族は、皆、真心こめて長い間朝廷の御ためにはたらいた。今は、四條畷神社に正行をまつつてある。

この後は、親房がひとり官軍の中心となつて、大いに忠義をつくしたが、まもなく病にかゝつてなくなつたので、これから官軍の勢はいよく、衰へるやうになつた。攝津の阿部野神社や岩代の靈山神社に、親房父子をまつつてある。



村上天皇—具平親王……親房—顯家  
 顯信  
 顯能

第二十六 菊池武光

肥後の菊池氏

朝廷ではたのみにしてゐた正行や親房のやうな忠臣がつぎくになくなつたばかりでなく、國々の官軍もまたたいてい衰へたが、ひとり九州では、官軍の勢がなほ盛であつた。ときに弘安の役に武勇の譽をあげた菊池武房の孫の武時は、元弘三年、國々に勤王の軍が起つた時、早くも義兵を肥後に起し、わづかな兵をひきゐて博多の賊を討ち、はなぐしい戦死をとげた。これが九

尋史上

武光が懐良親王をお迎へ申しした

筑後川の戦

州で起つた勤王の軍のさきがけて、その後、武時の子らも、皆よく父の志をうけついで忠義をつくした。時に、後村上天皇の御弟懐良親王は、西國の官軍を統べられるために、九州へお下りになつた。武時の子の武光は、これを肥後にお迎へ申し、親王をいたゞいて、たびたび賊軍と戦ひ、その勢がおひく、盛になつた。尊氏はそのなりゆきを心配して、みづから武光を討たうとしたが、まだ出かけない中に、病にかゝつてにはかに死んだ。菊池氏の勢はいよく、強くなり、武光は親王をいたゞいて兵を筑後に進め、賊の大將少貳頼尙の軍と筑後川をはさんで陣を取つた。武光は川を渡つて戦をしかけ

たが、頼尙は陣を堅うして、なかく、戦はうとしなかつた。そこで、武光は、さつそく兵を分けて攻めることとし、自分は親王といつしよに、敵の中堅を目標としてつき進んだ。この戦はたいへんはげしく、親王は御身に三箇所までも傷をおはれたほどであつた。武光は、馬がきずついた上



筑後川の戦

尋史上

子孫つぎつぎに朝廷の御ためにしたく

に、<sup>かぶと</sup>冑がさけたので、敵を斬つてその馬と冑を奪ひ、死を決してめざましく戦つた。そのため、さすがの敵もさへへきれずに敗れ退き、頼尙は本國筑前に逃げかへつた。世にこれを筑後川の戦といふのである。武光は、なほも親王をいたゞいて筑前に進み、頼尙を走らせて太宰府に入り、さらに京都へ向はうとしてゐたが、その後まもなくなくなつた。せつかく勢づいてきた九州の官軍は、これからだんく、衰へていつた。けれども、武光の子孫は、なほ長い間朝廷の御ために力をつくした。肥後の菊池神社は、この菊池氏一族の忠臣をまつたお社である。

藤原忠平……武房—時隆—武時—武敏—武重—武光

尊氏の無道

第二十七 足利氏の僭上

尊氏は、さき以後醍醐天皇からおてあつゝい恩賞をいただきながら、その御恩を忘れて、朝廷にそむき、忠義な人を殺し、おそれ多くも皇族を害し申すやうなことさへした。かやうな無道の行が多かつた上に、自分の家をもよく治めることが出来ず、兄弟互にくみあひ、はては弟の直義を毒殺してしまつた。部下の將士もたびたびそむき、また互に争つてゐたので、いつもさわぎが絶

尋史上

細川頼之が義満をたすけた

えなかつた。その間に、足利氏は、尊氏の子義詮から孫の義満の代となつた。

義満が年やうやく十歳の時、父義詮は重い病にかゝつて、もはや回復の望がなくなつたので、日頃信賴してゐる細川頼之に遺言して、義満をたすけ導かせることにした。頼之は、足利氏の一族であるが、いたつてつゝし、深い人であつたから、義満のそばに仕へてゐる人々には、常におごりを戒め、またわがまゝな大名をおさへるなど、真心こめてその主をたすけた。それ故、これから、足利氏の基はだん／＼固くなつた。

後龜山天皇が京都におつかへりになつた

義満がおご  
たりをきはめ

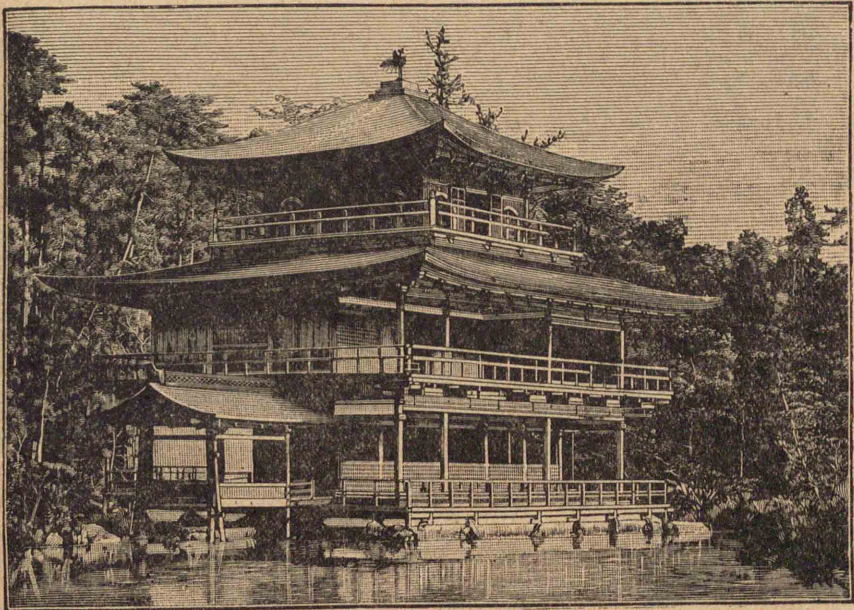
かへりなざるやうに願ひした。後村上天皇の御子九代十九後こ龜山かめやま天皇は、かねく、長い間の戦亂で、萬民が苦しんでゐることをふびんに思つていらつしやつたので、たいちにその願をお許しなまつて、京都におかへりになり、神器を代第百こ後こ小松まつ天皇にお傳へになつた。時に紀元二千五十二年げん元中九年ちゆう後醍醐天皇が吉野へ行幸をなさつてから、およそ六十年ばかりたつてゐた。今までたいへん亂れてゐた世の中も、これから、やつとしづまつた。けれども、義満は征夷大將軍となつて、大いに勢を振るふやうになり、ふたたび武家政治の世となつた。義満は、まもなく將軍職を子の義持よしもちに譲つたが、自分は

尋史上  
尋史上

金閣

太政大臣になりたいたと望んだ。武人で太政大臣に任せられたことは、平清盛から後全く例がなかつたのである。それにもかゝらず、義満はたびく、朝廷に願ひして、とうく、望をとげた。このやうに、義満のわがま、はしだいにつのり、はてはおごりの生活にふけるやうになつた。その室町むろまちの邸は、この上ないりつばなもので、庭には美しい花がたくさん植ゑてあつたから、人々はこれを花の御所ごしよといつた。義満はまた、京都の北山きたやまに別莊を造り、庭に三層の樓閣ろうかくを建てて、壁といはず、戸といはず、すべて金箔きんぱくで張りつめた。その美しさは、言葉にも、筆にもつくせないほどで、人々は、これを金閣きんかくと呼んだ。

義満の僭上



義満は髪をそつてこゝに住み、なほ政治をとつてゐたので、朝廷の官吏も、皆義満の威勢に恐れ、この別荘に来てその命令を受けるといふ有様であつた。

義満は、勢の盛なのにかせて、臣下の分をわきまへぬわがまゝな行が、いよく多くなつた。か

尋史上  
尋史上

義満が國體  
たをかろんじ

つて比叡山に登つた時などは、關白以下の公卿を従へて、おそれ多くも上皇の御幸の御儀式にまねたほどであつた。この頃、支那は、元がほろびて明の時代となつてゐた。義満は使を明にやつて交際をはじめたが、明主が義満を指して日本國王といつても、義満は別には、かゝる様子もなく、自分からも進んで日本國王と名のつて、書を送つた。わが國には、天皇の外にまた國王があらうか。義満の行は、實にわが國體をかろんじたものといふべきである。

第二十八 足利氏の衰微

義政が政治に怠つた

義満から四代たつて、義政の代となつた。義政はわづかに九歳で家をつぎ、ほどなく將軍となつたが、少しも政治に心をいれなかつた。たまく、大風や洪水があつて、五穀がみのらない上に、悪病がはやつて、人民が非常にこまつてゐるのに、義政はいつかうあはれみの心がなかつた。かへつて大金をかけて盛に室町の邸の普請などをしたので、第二代後花園天皇は、たいそう御心配になつて、これを戒められた。さすがの義政もこれにおそれ、いつて、いつたん工事をやめさせたが、なほたびく、花見の宴などを開いて、おごりにふけてゐた。それ故、費用が足らず、人民からたくさんの税を取立てたので、人

尋史上

尋史上

足利家の相續争

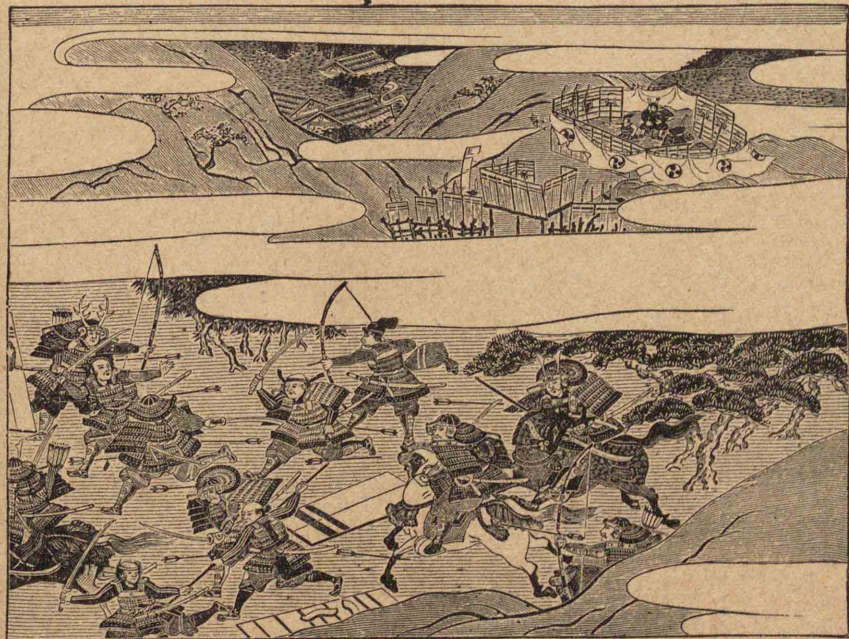
人の苦しみはますますくつものり、世の中はいよく、さわがしくなつた。

義政は、三十歳ぐらゐになると、はや政治にあいてきた。けれども、まだ子がなかつたので、弟の義視を養子とした。さうして、義視に將軍職を譲らうと考へ、細川勝元にこれを助けさせた。この時、義政は、この後たとひ子が生まれなくても、決して義視を退けるやうなことはしないと、堅く約束した。ところが、まもなく實子の義尙が生まれると、その母は、どうかして義尙を立てようと考へ、山名宗全が勝元におとらない勢があるのを見て、これに義尙をたのんだ。足利家の相續の争は、そこで、細川氏と山

細川勝元と山名宗全とが對立した

應仁の亂

名氏との争となつたのである。  
 紀元二千百二十七年、第百三代後土御門天皇の應仁元年に、勝元も、宗全も、めいめい味方の大軍を京都に呼集めた。さうして、勝元は、室町の幕府に入つてこゝに陣を取り、その兵はおよそ十六萬、宗全の陣はその西にあつ



應仁の亂

尋史上

尋史上

大亂の後の  
京都の有様

て、その兵はおよそ十一萬であつた。これから、兩軍は一年の長い間戦つたが、その間に、宗全や勝元はつゞいて病死し、後には、兩軍の將士らも戦争にあいて、しだいに國々に引きあげていつた。京都のさわぎは、そこではじめてしづまつた。世にこれを應仁の亂といふのである。この亂のために、幕府をはじめ、名高い社や寺、その他たくさんの建物は、たいてい焼けてしまつて、花の都もあはれ焼野の原となつた。ある人が、この變りはてた有様をなげいて、

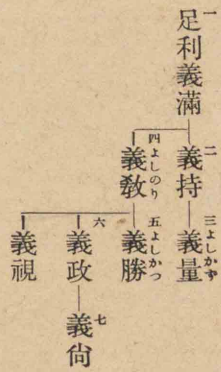
汝や知る都は野べの夕雲雀、

あがるを見ても落つる涙は。

幕府が衰へ

銀閣

とよんだ。  
かういふ大亂の中でも、義政はなほおごりをやめないで、後に、京都の東山ひがしやまに別荘を造り、義満の金閣にならつて、庭の中に銀閣ぎんかくを建て、茶の湯などの遊あそびにふけり、むだに月日を送つてゐた。それで、幕府の財政ざいせいはますます苦しくなり、將軍の命令は、ほとんど行はれないやうになつた。



尋史上

尋史上

第二十九 北條氏康

戦国時代

北條早雲が起つた

應仁の亂がやんだ後、多くの大將は、めい／＼、自分の國に引きあげて、なほ互に争つてゐたが、將軍の威勢が衰へてゐるので、これをおさへることが出来なかつた。この間に、英雄えいゆうが四方にきそひ起り、およそ百年の間、國々に戰亂は、ほとんど絶えまがなかつた。世にこの時代を戦国時代せんごくじだいといふのである。  
かういふ時勢じせいに、まづ起つたのは、北條早雲きたうさうんである。早雲は、平氏で、はじめ伊勢いせにゐたので、伊勢新九郎いせしんくわうといつた。生まれつきすばしこい人であるから、早くから時勢を見ぬいて、家をおこさうと考へ、六人の勇士をひきつれ



て駿河に下つて來たが、その頃東國がたいへん亂れてゐたのにつけいつて、急に奮ひおこり、伊豆を取つて北條にゐた。さうして、惜しげなく金銀をまいて人望をあつめ、また北條氏の子孫ととなへて、ますます士民をなつめた。早雲は、ついでに相模を取らうと考へ、使を小田原城にやつて、鹿狩といつはつて箱根山を借りうけ、大勢の兵士を獵師の姿にかへて山に入りこませ、不意に小田原城に攻寄せた。城主は大いに驚き、あわてて逃去つたので、早雲は、やすくと城を奪つてこゝに移つた。それからおひくゝに相模を従へて、勢を東國に振るふやうになつた。

氏康の修養

早雲の子の氏綱は、父に似て勇武な人で、兵を武藏に進め、上杉氏を破つて、江戸や川越などの城をおとしいれた。氏綱の子の氏康は、十二歳の頃まではたいへん臆病であつた。後、これを深く恥ぢ、大いにいくさの事を習つて、とうく勇氣のあるりつばな人となり、父の後をついで、ますます勢を盛にした。



北條氏康

川越の戦

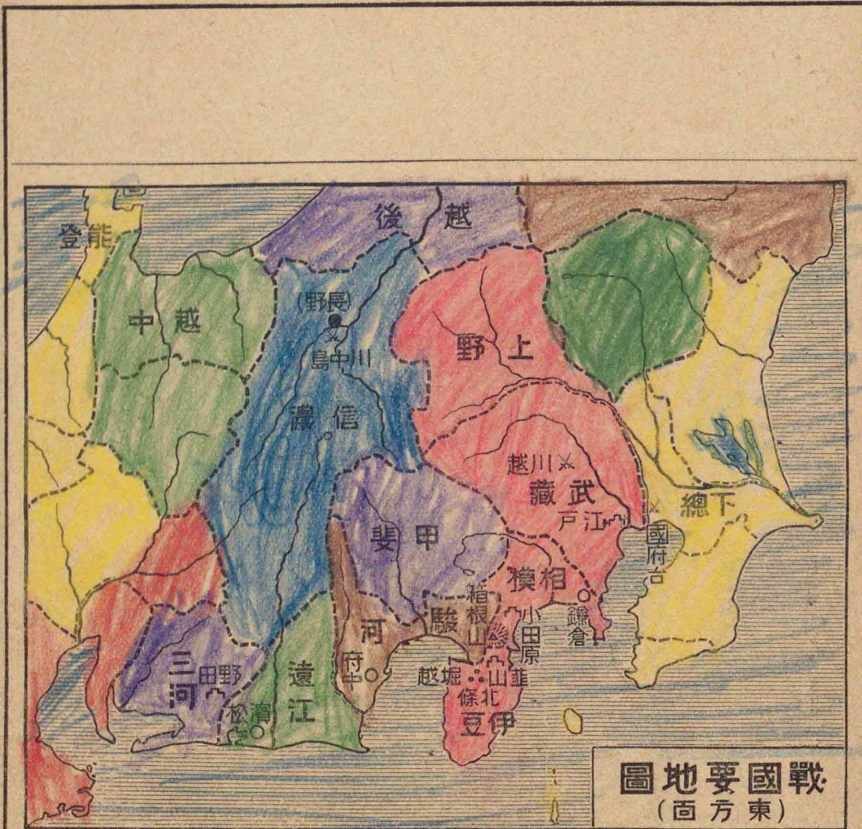
この頃、上杉朝定や憲政らが、川越城を取りかへさうとして、八萬の大軍をひきゐて攻寄せた。北

氏康はよく國を治めた

條氏の將は、堅く城を守つて、半年ももちこたへたが、そのうち、城中の兵糧がだんくく乏しくなつた。そこで、氏康は、みづから小田原から助けに行つたが、その兵はわづかに八千ぐらゐの小勢であつたので、敵の大軍にはとうていてむかふことが出来なかつた。そこで、わざと仲直りを申しこんで、敵にゆだんをさせ、夜中に急に攻寄せて、大いにこれをうち破つた。この時、朝定は戦死した。憲政は、いつたん上野に逃げかへつたが、ほどなくまた氏康に攻められて、越後へ走つた。これから後、氏康はますます他の國々を攻めて、大いに領地をひろめた。氏康は、戦が上手なばかりでなく、國を

尋史上

尋史上



戰國要地圖 (東方面)

治めることもすぐれてゐて、つねに部下をかはいがり、よく領内の人々をめぐんだ。それ故、人は、皆氏康になつき、他の國々からもその政治をしたつて、われ先にと小田原に集つて來るものが多かつたといふことである。早雲が起つてからおよそ六十年ばかり

りて、その領地は、伊豆をはじめ、相模・武藏・上野などの國にまでひろまつた。

第三十 上杉謙信と武田信玄

謙信のおひ  
北條氏と肩を並べて勢を争つてゐたのは、越後の上杉謙信である。謙信は、もと長尾氏で、平氏の出であるが、その家は、代々上杉氏に仕へて越後にゐた。父を長尾爲景といひ、謙信はその二男である。生まれつき大膽で、たいそう勇氣があつた。幼い時に、父が戦死して、兄の晴景が家をついだ。が、柔弱であるため、とかく部下にかろんぜられて、國中がたいへん亂れた。そこで、謙信は、僧となつ

尋史上

尋史上

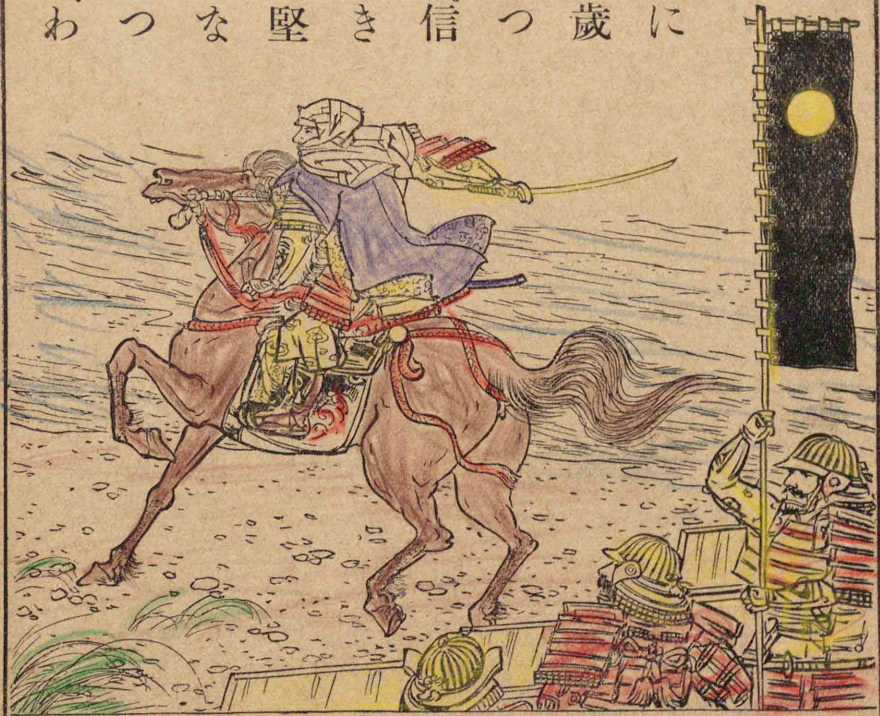
て他の國々を見てあるき、やがて越後に歸つて兄に代り、國內の亂を平げて、進んで近國をも従へ、その勢はなかなか盛になつた。後、上杉憲政が北條氏康に追はれて謙信をたよつて來た時、その家名をくれたので、長尾氏を改めて上杉氏を名のることになつたのである。これから、謙信は、憲政のために、たびく、兵を關東に出して北條氏と戦つた。ある時など、はるく、小田原の城下近くまで攻寄せたことがあつたが、敵は謙信の武勇に恐れいつて、途中一人として防ぐものもなく、まるで無人の原を行くやうな有様であつた。

小田原に迫つた

信玄のおひたち

この頃、甲斐に武田信玄がゐた。その家は、新羅三郎義光

から出て、代々甲斐の領主であつた。信玄は、幼い時から謀にすぐれてゐた。十六歳の時、父の信虎に従つて信濃に攻入つた。信虎は八千の兵をひきゐて攻めたが、敵は堅く城を守つてなかつた。ところが、信玄は、わ

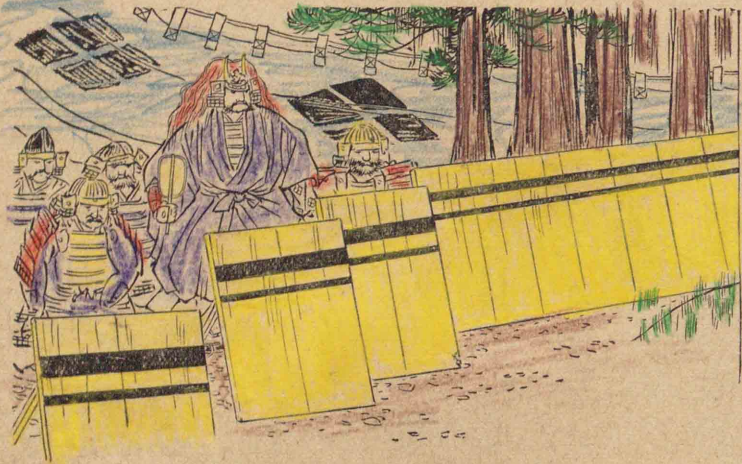


川中島で對陣してゐる上杉謙信

尋史上

づかに三百の小勢で謀をめぐらし、不意打をして城を

信濃を取つた  
川中島の戦



川中島で對陣してゐる武田信玄  
おとし入れた。ほどなく父に代つて、よくその國を治め、またしだいに信濃を攻取つたから、信濃の村上氏らは、越後に逃げて、謙信に助をたのんだ。  
謙信は、村上氏らのために、たびたび信濃に攻入つて、信玄と川中島で戦つた。中でも、ある年の秋の戦に、謙信が、一萬三千の兵を従へて川中島に陣を取つて

謙信が敵に塩を送つたに

信玄は望を死にげないで

ゐると、信玄は、二萬の大軍をひきゐてこれをはさみうちにしようとした。謙信は、たちちにその謀をさとつて、不意に信玄の陣に攻入り、みづから大刀を振るつて信玄めがけて切りつけた。信玄は、軍配團扇でこれを防いで、やつと危いところをのがれることが出来た。かやうにして、長い間その勝敗はきまらなかつた。謙信は、信玄とこれほどはげしく戦つてゐても、甲斐の人民が塩が不足して苦しんでゐることを聞くと、たいへん氣の毒に思ひ、越後からわざ／＼塩を送らせた。人々はその義理のあついののに、深く感心した。信玄と謙信は、めい／＼折さへあれば京都に上つて、天

尋史上

尋史上

謙信も目的をはたさないで死んだ

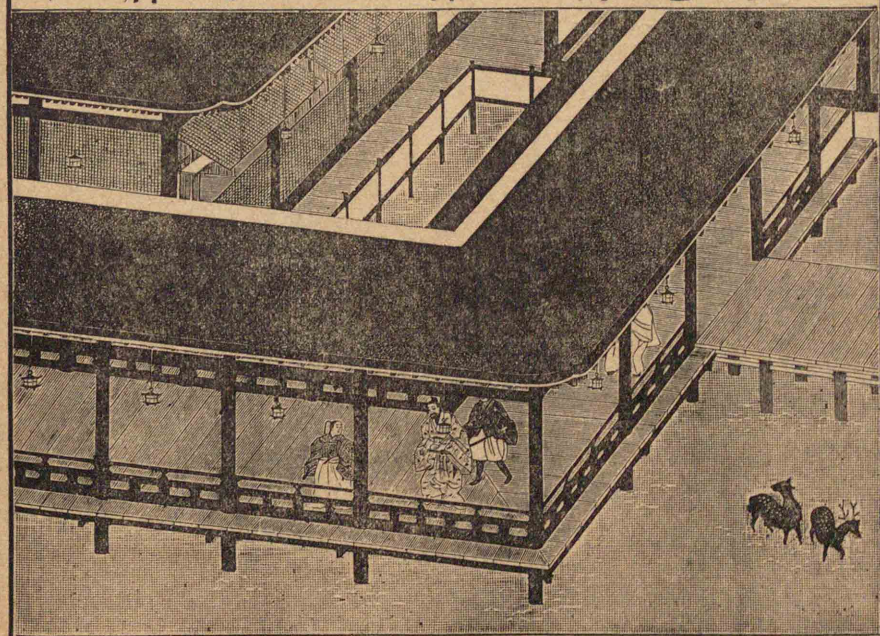
下に號令しようと望んでゐた。そのため、信玄は、盛に近國を攻取り、はては駿河を合はせ、遠江に進み、さらに三河に入つたが、たま／＼病にかゝつて、國に歸る途中で死んだ。謙信は、これを聞いて、よい相手を失つたといつて、たいそう惜しんだといふことである。謙信もまた、越中や能登などの國々を取り、大兵をひきゐていよく、京都へ向はうとした。ところが、出發まぎはになつて、急病で死んだので、とう／＼その目的をはたすことが出来なかつた。

第三十一 毛利元就

東國で、北條・上杉・武田の三氏が互に勢をほりあつてゐた時、西國では、毛利元就がだんく、勢力を増してゐた。

元就は大江山の子孫で、その家は代々安藝にあつた。元就は、幼い頃から大きな志をいだいてゐた。十二歳の時、嚴島神社に参詣したが、從者が

元就のおひたち



たし詣参に社神島嚴が就元利毛

尋史上

尋史上

一七六

大内氏のみだれ

何ごとか一心に祈つたのを見て、何を祈つてゐたのか。とたづねた。從者は「若君に、中國を平げさせたいと、答へた。すると、元就は、お前まさやうにと、祈りました」と答へた。すると、元就は、お前はなぜ天下を平げさせていたゞくやうにと、祈らなかつたか。天下を平げようと志しても、やつと中國ぐらゐしか取れない。中國を平げようと志したのでは、どうして中國を取ることが出来るか。といつて、大いに戒めたといふことである。元就は、成人するにつれて、智力も勇氣もともにすぐれ、またたいそう部下をかはいがったので、人々は、皆、心からなついた。これより前に、長い間、中國で勢を振るつてゐたのは、周

一七七

嚴島の戦

防の大内氏であつた。大内義興は、數箇國を領して、たいへん富強であつて、その城下の山口は、京都をしのぐほどにぎはつた。これに引きかへ、その頃の京都は、大いに衰へてゐて、朝廷でも御費用が足らないので、第五代後奈良天皇は、久しく御即位の禮をお舉げになることも出来ないやうな、おそれ多い御有様であつた。この時、義興の子の義隆は、その御費用をさし上げて、忠義をつくした。けれども、義隆は富強をたのんで、しだいにおごりにふけり、軍備を怠つたので、しまひには、その家臣である陶晴賢に害された。

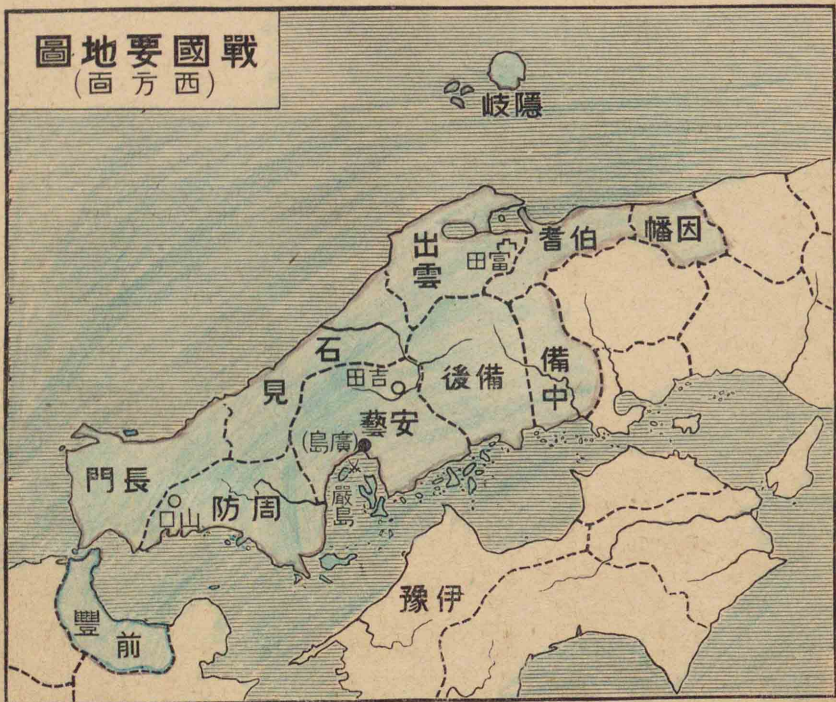
この頃、元就は義隆の部下であつた。そこで、すぐ義兵を

尋史上

尋史上

元就の勢が  
よくなつたが

戰國要地圖  
(西の方)



起して、晴賢の大軍を嚴島におびき出し、風雨の夜にまぎれて島におし渡り、不意にその陣に攻入つて、とうとう晴賢をほろぼしてしまつた。世にこれを嚴島の戦といつてゐる。

元就は、その勢でたちまち周防や長門など

御即位の費用をさし上げた

三人の子を戒めた

の國々を取つて大内氏に代つたが、また兵を出雲に出して尼子氏と争ひ、七年の間も富田の城を圍んで、とうとうこれを従へた。そこで、毛利氏は、中國や九州で十箇國餘りを領することになり、大内氏よりもはるかに強くなつた。けれども、元就は少しもおごる心がなく、よく大義をわきまへて、第六代正親町天皇が御即位の禮を行はせられる時には、その御費用をさし上げて、忠勤をばげんだ。またある時、その子毛利隆元、吉川元春、小早川隆景の三人に、互に仲よく助けあつて毛利家を守つてゆくやうにと、ねんごろにいひ聞かせた。隆元は父にさきだつて死んだので、その子の輝元が家をついだ。元春、隆

尋史上

尋史上

景の二人は、心を一にしてこれを助けたので、毛利氏は、元就の死んだ後でも、その勢は少しも衰へなかつた。

平城天皇…大江匡房…ひろもと廣元—毛利季光…ひろもと弘元—元就—隆元—輝元

—元春(吉川)  
—隆景(小早川)

第三十二 後奈良天皇

公卿の苦し

戦國時代には、北條、武田、上杉、毛利の四氏の外にも、豪族が所々にたてこもつて、互に土地を奪ひあひ、いつも戦争が絶えなかつた。それ故、國々にある公卿の領地はいふまでもなく、皇室の御料地でさへ、いつのまにか、勢力のある豪族にかされるといふ有様であつた。ところ



朝廷が衰へられた

が、幕府も貧しくて、皇室の御費用をさし上げることが出来なかつたので、公卿のうちでも、縁をたよつて地方に下るものが多く、京都に残つたものは、衣食にも事かくほどであつた。ある時、身分のある公卿に面會を申しこんだ人があつた。その人は、「この寒い時候に、夏の着物では面目ないから」と、ことわられたので、「いや、それで結構です」といつて、會つてみると、公卿は、素肌すはだに蚊帳かやをまとつてゐたさうである。當時の公卿が、どんなにあはれなくらしをしてゐたかは、この話からでも、おほかた知ることが出来よう。

尋史上

尋史上

ので、御所の築地つちが破れても、これをつくろふことが出来ず、賢所かしんじょうの御あかしの光は、遠く三條さんじょうの橋から見えたといはれてゐる。かういふ御有様であるから、おそれ多くも、天皇の毎日の御用さへ御不自由なことが、たびたびであつたといふ。

天皇は御儀式を御再興なさつた

天皇は神宮をおうやまひになつた

けれども、天皇は、このやうに乏しい御費用の中からも、なほ御儉約けんぎやくなさつて、長い間すたれてゐた朝廷の御儀式を御再興さいこうになつた。そののみか、伊勢神宮の御建物がたいそうあれてゐたので、これをお造りしようとお考へになつた。けれども、御心のやうにならなかつたので、いたしかたなく伊勢には奉幣使ほうへいしをさし向けて、そのわ

天皇の御仁徳

けをことわらせられた。殊に、天皇は、御あはれみの御心の深い御方であつた。それ故、たましく少しの貢でもさし上げるものがあると、これをすぐ皇族や公卿にお分ちになつた。また、日頃大御心おほみこころを萬民の上におそゝぎな

後奈良天皇の御筆

さること、ひととほりてなかつた。

# 般若心經

ある年、長雨ながあめが降りつゞいた上に、惡病あくびょうがはやり、そのために大勢の人が死んだ。天皇は、これを深く御心配になつて、御みづから經文を寫して、國々にお下しになり、そのわざはひがとれるやうに祈らしめられた。天皇が、御身のお苦しみを少しも御心にかけられず、たゞ一心に萬民をおめぐみ

尋史上

尋史上

くださつた御仁徳のかたじけなさには、一人でも感泣かんきふしないものがあらうか。

尋常小學國史 上卷 終

年表

御代數	天皇	紀元	年號	摘	要
一	神武天皇	元	元 年	天皇が御即位の禮をお舉げになつた	
三	景行天皇	七五七	二十七年	日本武尊が熊襲をお討ちになつた	
四	同	七七〇	四十年	日本武尊が蝦夷をお討ちになつた	
西	仲哀天皇	八〇〇	九 年	神功皇后が新羅をお討ちになつた	
六	仁徳天皇	九七六	四 年	天皇が税をおゆるしになつた	
九	欽明天皇	二二二	十三年	百濟からはじめて佛教が傳はつた	
三	推古天皇	二六四	十二年	聖德太子が十七條の憲法をお定めになつた	
三	同	二六七	十五年	聖德太子が使を支那におやりになつた	
六	孝徳天皇	二三五	八 年	大化の新政がはじまつた	
天	天智天皇	一三九	和銅三年	藤原鎌足がなくなつた	
皇	元明天皇	一三〇	天保三年	天皇が奈良の都をおたてになつた	
皇	聖武天皇	一四一	神護景雲三年	天皇が國ごとに國分寺をお造らせになつた	
皇	稱徳天皇	一四九	延暦十三年	和氣清麻呂が宇佐八幡の教を申しあげた	
皇	桓武天皇	一四四	延暦十三年	天皇が平安京をおたてになつた	

年表

五	桓武天皇	一四七	延暦十六年	天皇が坂上田村麻呂に東北地方をお討たせになった 最澄と空海とが唐に渡つた。最澄は翌年歸つた
同	同	一四四	二十三年	空海が唐から歸つた
五	平城天皇	一四六	大同元年	菅原道眞が太宰府にうつされた
六	醍醐天皇	一五一	延喜元年	藤原道長がなくなつた
六	後一條天皇	一六七	萬壽四年	源賴義が安倍貞任らをほろぼした(前九年の役)
七	後冷泉天皇	一七三	康平五年	天皇が御位にお即きになつた
七	後三條天皇	一七六	治暦四年	源義家が清原武衡らをほろぼした(後三年の役)
七	堀河天皇	一七七	寛治元年	源爲朝らの軍がまけた(保元の亂)
七	後白河天皇	一八六	保元元年	源義朝らがまけた(平治の亂)
七	二條天皇	一八九	平治元年	平重盛がなくなつた
八	高倉天皇	一八九	治承三年	平氏がほろびた
八	安徳天皇	一八四	壽永四年	源賴朝が征夷大將軍に任せられた
八	後鳥羽天皇	一八五	建久三年	源實朝が殺されて源氏がほろびた
八	順徳天皇	一八七	承久三年	後鳥羽上皇が北條義時をお討ちになつた(承久の變)
八	仲恭天皇	一八一	同三年	元軍が攻めて來た(文永の役)
九	後宇多天皇	一九四	文永十一年	ふたたび元軍が攻めて來た(弘安の役)
九	同	一九二	弘安四年	新田義貞が鎌倉をおとしいて北條氏をほろぼした
九	後醍醐天皇	一九三	弘安三年	

一〇六	一〇五	一〇三	一〇〇	九		七										二九
正親町天皇	同 後奈良天皇	同 後土御門天皇	同 後小松天皇	同 後龜山天皇	同	同 後村上天皇	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
三三二	三三五	三三六	三三七	三三三	三三二	三三二	二〇四	二〇九	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六
弘治四年	天文十五年	文明十五年	應仁元年	應永四年	元中四年	同 十四年	同 九年	正平三年	同 三年	同 三年	同 三年	同 三年	同 三年	延元元年	同 二年	建武三年
上杉謙信と武田信玄とが戦った(川中島の戦)	毛利元就が陶晴賢をほろぼした(嚴島の戦)	北條氏康が上杉氏を破った(川越の戦)	足利義政が銀閣を造った	足利義満が金閣を造った	天皇が京都におかへりになった	菊池武光が少貳頼尙を破った(筑後川の戦)	北畠親房がなくなった	楠木正行が戦死した(四條畷の戦)	新田義貞が戦死した(藤島の戦)	北畠顯家が戦死した(石津の戦)	天皇が吉野に行幸をなさった	名和長年が戦死した	楠木正成が戦死した(湊川の戦)	足利尊氏がそむいた	護良親王が害されなさった	天皇が政権をお取りもどしなさった

年表

昭和九年二月廿三日印刷  
昭和九年二月廿七日翻刻發行  
昭和九年三月十一日翻刻發行

著作權所有  
著作兼  
發行者

尋常小學國史上卷

定價金拾五錢

文 部 省

東京市小石川區久堅町百〇八番地<sup>24</sup>  
日本書籍株式會社

代表者 大 橋 光 吉

印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地  
日本書籍株式會社工場

昭和九年三月一日  
文部省檢査濟

發行所

日本書籍株式會社

金

庫  
4  
82

広島大学図書  
2000081582  
